

〔資料〕

妙高山靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』翻刻と解題（1）

寺津 麻理絵・関口 静雄

「解題」・覚彦浄嚴と『妙極堂遺稿』について

※

妙高山靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』（写本、全七冊）を翻刻紹介する。妙極堂は、江戸湯島宝林山大悲心院靈雲寺開山覚彦浄嚴（一六三九—一七〇二）のことであって、当該書冊は浄嚴の遺稿を正徳五年（一七一五）十二月に門弟の義璨慧曦（靈雲寺第三世）らが集成したものである。

靈光寺は千葉県市原市椎津に所在し、堀河天皇の寛治年間（一〇八七—一〇九三）の草創と伝え、不動明王を本尊として不動院と称したというが、しかし同寺蔵の『過去靈簿』や現住職櫻井密嚴師編著『靈光寺歴代住持拾掇録』によると、元禄年間（一六八八—一七〇三）以前の同寺の動静を伝える文書資料が見当らず、寛治から元禄にいたる約六百年間の寺史が空白のままである。

現在、靈光寺は信貴山真言宗に属するが、かつては江戸湯島の如法真言律宗総本山宝林山靈雲寺の末寺であって、歴代住職も靈雲寺開山浄嚴・二世戒琛慧光・三世義璨慧曦の血脈を曳く律僧が多く、そうした法縁から柳沢・大河内・朽木等の諸藩主はじめ、久留里城主黒田家の外護を受け、祈願寺また如法真言律の学問寺として隆盛を誇った。現本尊の智証大師円珍作という不動明王像は、徳川五代將軍綱吉の側衆であった高崎城主松平右京大夫輝貞の奉納と伝えられるが、輝貞は城下に大染寺を建立して靈雲二世を継ぐ前の慧光を請じて八年間住持せしめたほどの如法真言律宗の外護者だった。

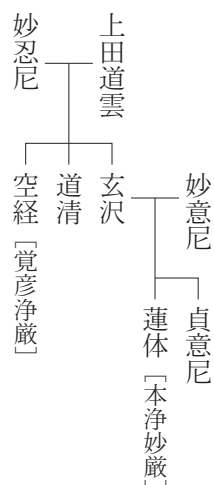
明治維新後はかつての面目を次第に失いながらも、かたくなに律院・学問寺として存続してきたが、しかし時代の変遷に抗し得ず、律院として無檀家であったことも一因し、太平洋戦争後はまったく荒廃した。それが昭和五十三年（一九七八）に櫻井密嚴師が十九世に晋住し、以来営々たる努力を紡いで、現今ようやく往時の寺觀を取り戻すまでに復興せられた。

なお靈光寺が宝林山靈雲寺の配下になったのは元禄五年（一六九二）八月五日のことである。許状が現存し、それには靈雲寺綱維戒琛慧光・同綱維慧球祥光の署名があり、不動院戒純房宛に下付されている。靈雲寺が建立されたのは元禄四年（一六九一）八月のことであるから、不動院は開創まもない靈雲寺に配下寺院として加わることを願い出たのである。おそらく靈雲一派に加えられたのを機に、不動院を改めて妙高山靈光寺を称したものと思われる。

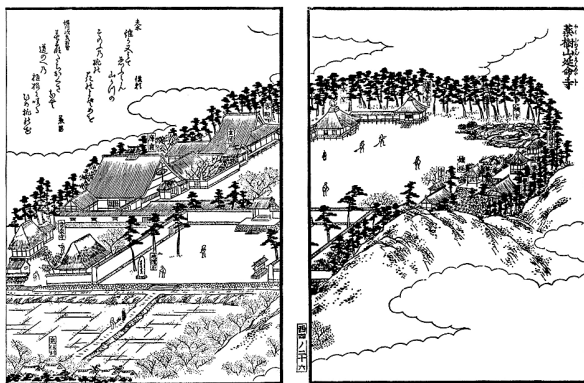
※

浄嚴は寛永十六年（一六三九）十一月二十三日、河内国錦部郡鬼住村（現、大阪府河内長野市神ガ丘）に、この地の累代莊官であった上田氏の道雲を父に、同村秦氏の妙忍を母とし、三男四女の末子として生まれた。幼時から秀才の名高く、みずから空経と称し、葷羶を厭い、女人の近づくを嫌う「生まれながらの僧」であった。慶安元年（一六四八）十歳にして高野山に上り、筒井順慶の息という悉地院雲雪を師として剃髪し覚彦雲農と称し、後に焉求山人・虚白子・無等子・三等子・妙極堂などと号した。

「浄厳・蓮体家系」



明暦三年（一六五七）七月、師の雲雪が遷化すると、釈迦文院朝遍を師として同院に移り、初めて高野山学侶に交衆した。万治元年（一六五八）六月、南院良意に従って安流の許可を受け、寛文元年（一六六一）正月には安流の伝法阿闍梨位を受けた。二十三歳の時である。しかし同九年（一六六九）十一月、法弟賢龍の指導を巡って法兄頼周と間隙を生じ、頼周の怨讐を避けて翌十年（一六七〇）九月中旬故郷鬼住村に下山した。だがすぐに南院良意の命があつて上山したところ、二十八日夜、懼れていた頼周から刃傷を受けた。再び下山して鬼住村で養生し、翌十一年（一六七二）正月、師朝遍が遷化したのを機に高野山の交衆を辞した。すると間もなく九月に父道雲が、十一月には家兄道清が没する不幸に遭った。

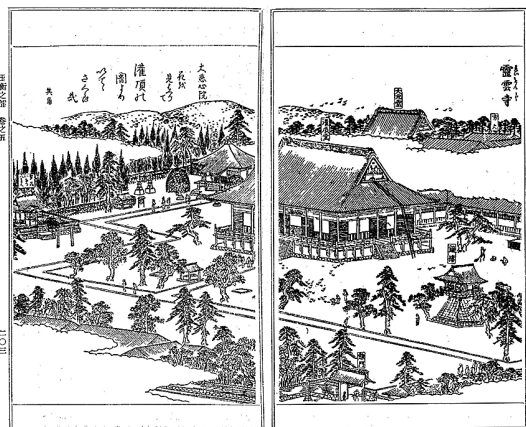


葉樹山延命寺 嘉永6年刊『西国三十三名所図会』（臨川書店「版本地誌体系」2、1991.4に拠る）

寛文十二年（一六七二）三十四歳の時、正月に儀軌を書写して師朝遍・亡父道雲・亡兄道清の菩提を弔うと、父道雲の俗宅地に如晦庵を建て、翌十三年三月には和泉神鳳律寺の快円に従って菩薩戒を受けて浄厳と改名した。延宝五年

（一六七七）五月十三日、自説の如法真言律の道場として如晦庵を改めて葉樹山延命寺を創建し、さらに同七年（一六七九）には叡尊ゆかりの河内八尾の南都西大寺末の獅子吼山教興寺を尊学忍空より譲られて再興した。以後は根本仏教回帰のため戒律復興に邁進して新安祥寺流を開創し、真言密教の修行法を統一しようと腐心した。それとともに真言宗の布教にもつとめ、衆庶のもとにに応じて近隣の河内・和泉・摂津はいうまでもなく、播磨・淡路・備後・讃岐、また遠く江戸・下総・上州にまで教化の歩を運んだ。

浄厳は民衆の支持信頼を集めたばかりでなく、鬼住村の領主本多忠恒はじめ、四国高松の松平頼重など諸大名の帰依も得た。なかでも五代將軍綱吉の側用人柳沢保明は元禄三年（一六九〇）十月、江戸深川靈巖島の別業に浄厳を請じて瑞雲庵に住ませ、翌四年（一六九二）三月には、「大学」を講ずるために保明邸を訪れた將軍綱吉に、知足院隆光や金地院崇寛らに加えて浄厳にも経を講じさせている。時に浄厳五十三歳、これが將軍綱吉に謁見した最初であった。以後綱吉の篤信を得、さらに保明の推挙によっ



靈雲寺 天保7年刊『江戸名所図会』（有朋堂文庫「江戸名所図会」3、1914.5に拠る）



寛彦浄厳墓 宝林山妙極院

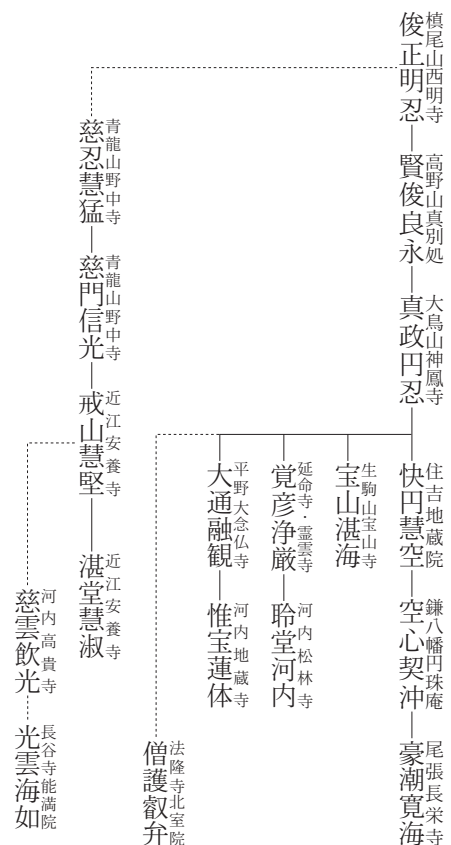
て同四年八月二十二日、幕府より湯島（現、東京都文京区湯島）に三千五百余坪の地領と金三百両を下賜され、幕府永代の祈願所として宝林山靈雲寺を建立した。その三年後の元禄七年（一六九四）六月には、靈雲寺は関八州真言律の本寺を命じられている。

以後、浄厳は江戸市中においても熱心な布教活動を行い、真言宗の高僧として名を馳せたが、みずからは権勢をもとめず、生前から「今大師」「今弘法」と讃えられた生涯を、懐かしい河南の延命寺に帰ることなく、元禄十五年（一七〇二）六月二十七日、六十四歳で終え、翌日谷中の妙極院（現、台東区池之端）に葬られた。

浄厳は高野山に在山の折、顕密を修学して若二十三歳にして伝法阿闍梨となり、諸流派の統合と修法の革新を図って悉曇学などの講座を開いたが、交衆の一部から嫉視されて刃傷を受けたのだった。これが高野下山の大きな理由であるが、延宝元年（一六七三）三十五歳の三月に、律三僧坊の一つである和泉の大鳥山神鳳律寺の真政円忍の弟子快円慧空に従って住吉地藏院で菩薩戒を受けて浄厳と改名してからは、京都仁和寺の尊寿院頭證と真乗院孝源に従って西院流を受法し、真政円忍や、のちに生駒山宝山寺を開いた宝山湛海、黄檗の鉄眼道光、また野中寺一派と交流しつつ、戒律遵守の風潮がまったく沈滞していた真言律の復興を目指して盛んに活動を展開した。

唐僧鑑真が苦難の末にもたらした戒律は、出家者が行住坐臥つねに実践すべき日常規範のほずであるが、持戒の志はつねに失われるものでもあって、鎌倉時代には興福寺の解脱貞慶や西大寺の思円房叡尊・唐招提寺の窮情房寛盛らが戒律復興と慈善救済事業に励み、また近世初期には京都植尾西明寺の明忍房俊正が先陣を切った戒律復興の浄風が植尾山西明寺・大鳥山神鳳寺・青龍山野中寺の律三僧坊を生み、そこから多くの優れた律僧を輩出し、戒律復興の波はたびたび繰り返し起こされた。浄厳はそうした戒律復興時代の浄風の中で生まれ育ち、持戒清浄の日常を堅固に実践した律僧であったことを知っておいてよい。

「近世律師略系譜」



※

靈雲寺編『靈雲寺』²は、浄厳の生涯の行業を次のように一覧している。

- 剃髮弟子 四三六人
- 授結縁灌頂者 三十万四千五十五人
- 授三帰五戒八戒十念等者 一百五十万余人
- 講経筵席数 三十九部 一百三十五処 二千八百七十六会
- 諸儀軌伝授 五回
- 大日経疏伝授 七十八会 一回
- 撰述書 四六五部

右を見ると、浄厳が授けた結縁灌頂者が三十万四千余人、また三帰・五戒・八戒・十念等を授けた者が一百五十万余人であり、その膨大な数に驚く。結縁灌頂は、目隠しをした受者が、諸尊仏が描かれた敷曼陀羅の上に花を投げて、落ちたところの仏と縁を結ぶ儀式で、その仏が結縁者の生涯の守護仏になるという。この儀式は『江戸名所図会』巻三に靈雲寺の伽藍図に添えて「目隠しは覚彦比丘が元祖なり」の古川柳と、芭蕉門の宝井其

角（一六六一―一七〇七）の「灌頂の闇よりいでて桜かな」の句が記されているように、浄厳が民衆を教化するために創案したものだ。この方法は衆庶を信仰の道に容易に導き、結縁者に仏を身近なものと感じさせたから道俗貴賤に受け入れられて膨大な結縁者を生じたのである。しかし浄厳は単に結縁灌頂を受けさえすれば仏縁を結ぶことができるとしたわけではなかった。五戒・八戒・十念の授与においてさえ、受けるにはまず精進潔斎をさせるなどし、ことによって厳重な誓約に血判を捺させてまでしてその履行をもとめたのであり、種々印版した弁財天女・地藏菩薩・不動明王などの形像、つまり御影ふだや真言・陀羅尼等を授与する際には紙墨料の負担をもとめ、厳重な日課を誓約させていた。このことが却って衆庶の浄厳に対する信頼と帰依を深めたものと思われる。結縁灌頂や受戒に、その功德や利益・靈験を期待する民衆は、それを持戒堅固の清僧から正しい作法によって受けてこそ効験が発揮されることを知っていたからである。

浄厳は靈力にもすぐれ、靈雲寺開山以前にも延宝六年（一六七八）四月、讃州善通寺誕生院主に招かれて法華経を講じた折に雨請いをして靈験を示したのをはじめ、諸国で種々祈禱の靈験を示していた。浄厳の俗甥で、十二歳で弟子となり、二十九年間という生涯の大半を師に随侍した惟宝蓮体（二六三―一七二）の『浄厳大和尚行状記』『浄厳大和尚靈徳記』は、浄厳の靈験の数々を記しているが、晩年の元禄十三年（二七〇〇）五月には將軍綱吉より柳沢保明の病氣平癒祈禱を命じられて愛染明王法を修して効験があり、翌十四年（二七〇一）正月には綱吉息女鶴姫の痘瘡平癒祈禱を行ずるに、愛染供を修して平復の靈験を示している。『徳川実紀』元禄四年（一六九二）八月二十二日条に「此ごろ真言僧寛彦は有験の聞えありしかば。これより先柳沢出羽守保明が薦挙にて見参し。府に駐錫の地を給はるべしとて。本郷湯島の閑地三千五百余坪を給ひ新寺を建立せしめらる。また保明が邸にめし金三百両たまひ構造の費にあてられ。今より永く天下泰平の御祈丹精を抽べき旨を命ず」とあるように、新寺すなわち宝林山靈雲寺開山は浄厳の祈禱に「有験の聞えありし」ゆえであったことを忘れて

はならない。

また、撰述書は四六五部という。これも膨大だ。蓮体の元禄十五年（一七〇二）十二月に撰した『浄厳大和尚行状記』は、浄厳の主著とされる『悉曇三密鈔』七卷・『弁惑指南』四卷・『普通真言蔵』三卷はじめ十六部が版行流布し、『二教論通解』『梵網古迹集解』『悉曇字記鄔那地鈔』など十三部が未梓行だといひ、そのほかに「秘密諸尊次第口訣要鈔等」が三百余卷も存すると伝えている。浄厳の著作の本領はおそらくこの「秘密諸尊次第口訣要鈔等」にあったと思われる。『浄厳大和尚靈徳記』に「諸尊法ノ表白等ヲバ必ズ自ラ製作シ玉フ」と伝えるように、既存の儀軌や真言の字義・句義に謬りの多いことを常々嘆いていた浄厳からすれば、それは当然のことであった。折々行われる法会・法要に関わることがあれば、浄厳は次第を改訂・新訂し、あるいは表白・教化をも草しては旧弊を刷新し続けたのである。

※

蓮体の『浄厳大和尚靈徳記』に「平生ノ著述、詩歌行伝記碑銘等七卷アリ」とあって、おそらくこれが『妙極堂遺稿』を指すものと思われる。靈光寺に『妙極堂遺稿』が所蔵されるにいたった経緯の詳細は不明であるが、管見では『妙極堂遺稿』を称する書冊は他に見出しえず、靈光寺所蔵本が唯一と思われる。靈光寺は如法真言律宗一派への極めて早い参加寺院であって、靈光寺歴代には靈雲寺開山浄厳はじめ二世慧光・三世慧曦から直接薫陶を受け、安祥寺流を相承した者が少なくない。たとえば靈光寺初世戒純等珠近住は、不動院を靈雲寺配下になることを申請したその人であるから浄厳や慧光の警咳に触れていないはずはなく、二世覚円證心は慧光の弟子で、慧曦に依止した人であり、三世祥雲慧龍と四世本瑞光雲ともに慧光の弟子であった。靈光寺に伝蔵される事相書・次第書類の写本には、その底本に浄厳の自筆本を採ったものが多いことから、靈雲寺開山浄厳の遺稿集である『妙極堂遺稿』が伝えられていても不思議ではない。

靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』七卷七冊は、正徳五年（一七一五）十二月に、

のちに靈雲寺三世を継いだ浄嚴門弟の慧曦らによって年次順に編纂された遺稿集である。その年次構成と奥書を一覧すると次のようである。

・第一冊巻一 慶安三年（一六五〇、十二歳）／承応二年（一六五三、十五歳）

（奥書） 右遺稿巻之一正徳五（一七二五）乙未年十一月廿八日

取稿本而正字校乱編次之畢 比丘慧曦

・第二冊巻二 承応二年（一六五三、十五歳）／万治三年（一六六〇、二十二歳）

（奥書） 妙極堂遺稿二之卷浄書之了 光濟

・第三冊巻三 寛文元年（一六六一、二十三歳）／寛文三年（一六六三、二十五歳）

（奥書） 妙極堂遺稿三之卷依稿本浄書之了 正徳五年（一七二五）十一月

三十日沙門光猷

・第四冊巻四 寛文四年（一六六四、二十六歳）／寛文八年（一六六八、三十歳）

（奥書） 右遺稿四之卷浄書之了斯之卷乱脱差誤殊多且依草本写之 比丘

慧曦

・第五冊巻五 寛文九年（一六六九、三十一歳）／寛文十二年（一六七二、三十四歳）

（奥書） 妙極堂遺稿五之卷浄書之了 泰禪

・第六冊巻六 寛文十三年（一六七三、三十五歳）／天和二年（一六八二、四十四歳）

（奥書） 右遺稿巻之第六以妙極堂真筆之草本而浄書之畢時正徳五龍次十

二月朔日 沙門光鑑

・第七冊巻七 天和二年（一六八二、四十四歳）／元禄十二年（一六九九、六十二歳）

（奥書） 妙極堂遺稿七之卷浄書之了 慧実

右に見るように、奥書に「取稿本」（巻一）・「依稿本浄書之」（巻三）・

「依草本写之」（巻四）・「以妙極堂真筆之草本而浄書之」（巻六）などあり、

「草本」も「稿本」も浄嚴の真蹟をいうものと思われるから、これが浄嚴

真蹟を底本として書写編集されたことは明らかである。浄嚴真蹟の文集は、

行武善胤氏『靈雲叢書解題』⁴によれば、初期のものを『滑稽集』と呼び、

のちに『虚斎漫稿』あるいは『虚白道人集』と称したといい、靈雲寺に所

蔵される『虚斎漫稿』（七巻）は真蹟で、慧曦らが編集した靈雲寺所蔵

『妙極堂遺稿』の原本だという。行武氏が大正五年（一九一六）の時点で靈

雲寺所蔵という『妙極堂遺稿』が、現在靈光寺に所蔵される『妙極堂遺稿』と同一本かどうか不明だが、しかし靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』の巻一奥書に「取稿本而正字校乱編次之畢」、巻四奥書に「浄書之了斯之卷乱脱差誤殊多且依草本写之」、また「妙極堂遺稿叙」に「於是編次」と慧曦は記しているから、『妙極堂遺稿』（靈光寺所蔵）はただ単に『虚斎漫稿』を書写浄書しただけのものではない。『滑稽集』『虚白道人集』『虚斎漫稿』のいずれも散佚して伝わらず、『妙極堂遺稿』も現在は靈雲寺に所蔵されていないから、浄嚴の真蹟を底本として書写編集された靈光寺所蔵の『妙極堂遺稿』は、浄嚴自選の文集の面影を宿しているものと推量されて貴重である。『妙極堂遺稿』には浄嚴作の詩・文・銘・賛・縁起・表白・行状・墓誌等が収められていて、蓮体の『浄嚴大和尚行状記』『浄嚴大和尚靈徳記』はじめ諸伝記類に記された浄嚴の行実を確かめることができ、また諸伝記類にも見られぬ少年期・青年期の詩文は、その日常の断片を伝えていて伝記の間隙を埋めることができる。またかつて上田靈城師が名著『浄嚴和尚伝記史料集成』⁵のなかで『妙極堂遺稿』を解題して、

浄嚴和尚はその生存中より弘法大師の再来と風評されていたが、師の思想なり行動なりが大師に傾倒していた点からみて決して不当な風評ではない。大師の没後、その詩文が、門弟真済によって十巻にまとめられ『性霊集』と名付けて伝えられた。今又、浄嚴の詩文が門弟によって編集されたことは、大師再来の信仰が靈雲門下に根づきつつあったことを示している。妙極堂遺稿叙の冒頭に「夫陶治性靈吐露情実云々」と慧曦が述べているのは恐らく『性霊集』をふまえての修辞であろうと思われる。

と指摘されている。『妙極堂遺稿』の編纂が靈雲門下に「大師再来の信仰」が根づきつつあったことを示しており、それが真済編『性霊集』を意識してのものであったとする靈城師の慧眼は尊い。『妙極堂遺稿』は浄嚴研究の必須資料であるばかりでなく、近世真言密教史上においてもまことに重要な資料といえることができる。

※

『妙極堂遺稿』の編纂に関わったのは慧曦・光濟・光猷・泰禪・光鑑・慧実の六名であるが、第一冊巻一の冒頭に「妙極堂遺稿叙」を記し、奥書に「取稿本而正字校乱編次之畢」と編纂の基本方針を記していることから、遺稿編纂の主導者は慧曦であったことは明らかだ。靈雲寺第三世義璨慧曦（字は義山にも作る。一六七九―一七四七）は泉州式下郡宮古村の人で、元禄初年（一六八八）に浄嚴に謁して弟子となり、初め慧泰と称し、無礙堂と号した。元禄五年（一六九二）十四歳の時、湯島靈雲寺道場で胎蔵界壇、翌年金剛界壇への入壇を果たしたが、浄嚴没後は専ら二世戒琛慧光に師事し、享保十二年（一七二七）慧光が南都東大寺戒壇院長老に晋山転住すると、師命によって靈雲寺三世を継いだ。四十九歳のことである。以後靈雲寺の教線拡大に尽力したが、延享三年（一七四六）四世に筑後東林寺の慧鑑法明律師を薦めて支院に退隠し、翌四年（一七四七）六月病没した。寿六十九、廟所は妙極院にあり、開山浄嚴の墓石に並んでいる。

第二冊巻二を浄書した光濟は靈雲寺二世慧光の弟子で、靈雲寺塔頭宝光院四世を継いだ人物で、享保十七年（一七三二）七月、義彦光天の靈雲寺灌頂殿における大比丘戒授与に慧曦以下、証明師として、慧実・證心（靈光寺二世）とともに参席し、翌十八年（一七三三）二月には、東大寺戒壇の再興が成就し、その慶讃法要に靈雲一門とともに出仕している。師の慧光は享保十九年（一七三四）十二月四日夜、六十九歳で遷化した⁶が、その直前再び起ちがたいことを知って門下の光国・光範・光濟を召し、後事を戒示して来往に規矩した。三人はその遺戒に行業を付して『南都東大寺慧光長老御遺戒』一卷を編じた。

第六冊巻六を真筆の草本をもって浄書した沙門光鑑（一六九三―一七一八）は、正徳五年（一七一五）二世慧光から受鉢戒を受けた弟子で、靈雲寺塔頭五大院主を継いだ⁶が、『靈雲第二世住持録』（巻四）享保三年（一七一八）八月十八日条に、慧光みずから、「十八日巳之下剋、弟子沙弥寂忍諱光鑑行年二十有六不幸而死。稟性和順、臨終要期往生兜率、哀悼叵堪」と記し、

その早世を哀惜している。光鑑は二十二歳の折、『遺稿』の編纂業に参加したのであるが、正徳三年（一七二三）十八歳のとき『宝林宝蔵書籍目録』一卷を撰述した俊才であった。

第七冊巻七を浄書した慧実⁶は、慧光の『秘密比丘戒体記』に「享保六年辛丑六月十二日、優婆駄耶於灌頂殿、為^ニ慧弁^{名智}・海印^{名智}・直乘^{名智}・寂淵^{名智}・宝嚴^{名智}五沙弥^{名智}、聴^ニ説示^{名智}」と見える寂淵恵実^{名智}と思われる。すると、慧実⁶は、蓮体・慧光・慈妙とともに浄嚴門下の四天王と称された慧球祥光（一六六七―一七〇二）の高足で、享保十六年（一七三一）に靈雲寺塔頭五大院主となり、のちに河内延命寺五世を継いだ人である。

なお、第三冊巻三を浄書した光猷と、第五冊巻五を浄書した泰禪の行実については『妙極堂遺稿』のほか知るところを得ない。しかし右記した四名の行歴から推して、慧光あるいは慧曦の弟子であったと思われる。『妙極堂遺稿』の編纂事業には、早世した寂忍光鑑のように、宝林の俊秀が選抜されたものと考えてよからう。



紙本著色 義璨慧曦絵像（部分）
118.9×57.6 cm 妙高山靈光寺蔵

このたび靈光寺住職櫻井密嚴師より格別の御理解をいただき、『妙極堂遺稿』全文の影印・翻刻を許された。深甚の謝意を表し、御礼を申し上げる。

注

- 1 『浄厳大和尚行状記』（上下二巻）は、上田霊城師が延命寺蔵写本を翻刻校訂され、『浄厳和尚伝記史料集成』（一九七九年八月、名著出版）に収められている。その一八三頁に「自う空経ト名乗玉ヒテ、生ナカラノ僧ナリ」とある。
- 2 『霊雲寺』（二〇〇一年六月、霊雲寺）。
- 3 新訂増補国史大系43『徳川実紀』（新装版二〇〇三年三月、吉川弘文館）。
- 4 『霊雲叢書解題』（一九一六年十一月、丙午出版社）三六・三七頁。
- 5 『浄厳和尚伝記史料集成』三五頁。
- 6 『妙極堂遺稿』の編纂に携わった僧たちの行歴は、おもに『霊雲叢書解題』・三好龍肝氏『真言密教霊雲寺派関係文献解題』（一九七六年十一月、国書刊行会）・『浄厳和尚伝記史料集成』を参考にした。（関口）

〔追記〕

翻刻文の素稿はすべて寺津が作成し、関口が監修した。また画像処理等に岩城佑希（大学院生活機構研究科生活文化研究専攻一年）・岡本夏奈（日本語日本文学科四年）二氏の助力を得た。

【翻刻凡例】

- 1 妙高山霊光寺所蔵『妙極堂遺稿』（写本、全七冊）の第一冊目を翻刻する。表表紙に落剥した題簽の一部が残るが、書名は巻頭に載る霊雲寺第三世義璨慧曦の「妙極堂遺稿叙」に拠った。縦二七九mm・横一八五mm、袋綴装、渋茶色紙表紙。
- 2 原則として通行の文字表記を用いて翻刻した。
- 3 行取・清濁・誤字・宛字は底本のままに翻刻し、改丁は「①01オのように示した。
- 4 踊字・繰返符号は二字分までは底本のままとし、それ以上は通行の表記に改めた。
- 5 訂正・後補等の指示があるときはそれに従い、本文中に後補挿入した文字には、「妙」のように傍点を付した。
- 6 句読点・空格を私に施した。
- 7 判読不能の箇所は□で示した。



(落剥)

└ ①表表紙

妙極堂遺稿叙

夫陶冶性靈吐露情實窮古今之變盡人物之奧
乃莫若於詩文是以及其至妙也則動天地感鬼
神之德大也哉雖然其學之難而成之少而得
於至妙也復彌稀矣開山和上幼出俗累早入
密門修習瑜伽遵奉戒儀專務弘通不屑斯事雅
言予嘗見文人詩僧日夜耽著推敲琢磨多廢道
業而謂詩也禪也至其悟入則一旦文與道自一
貫焉噫淳源難尋弊風易起寧與悟詩孰若悟禪
寧與學文孰若學道予非不好文欲不忘其本也

妙極堂遺稿叙

夫陶_ニ冶_シ性靈_ヲ吐_シ露_シ情實_ヲ窮_メ古今_ノ之變_ヲ盡_ス人物_ノ之奧_ヲ、
乃莫_レ若_{クハ}於詩文_ニ。是以及_{テハ}其至妙_ニ也、則動_シ天地_ヲ感_{セシム}鬼
神_ヲ。文_ノ之德大_{ナルカナ}也哉。雖然、其學_ヲ之難_ク、而成_{ルコトハ}之少_{シテ}、而得_{ルコトハ}
於至妙_ニ也、復_タ弥_タ稀_{ナリ}矣。開山和上、幼_{ニシテ}出_ニ俗累_ヲ、早_ニ入_ニ
密門_ニ、修_シ習_シ瑜伽_ヲ、遵_ニ奉_{シテ}戒儀_ニ、專_ラ務_ニ弘通_ヲ、不_レ屑_ニ斯事_ヲ。雅_{ネニ}
言_ノ玉_ヲ、予嘗_テ見_ニ文人詩僧_ヲ、日夜_ニ耽著_シ、推敲琢磨_{シテ}多_{クハ}廢_ニ道_ヲ
業_ヲ。而謂_フ、詩也禪也、至_ニ其悟入_ニ、則一_{ナリ}。且文_ト与_レ道_ヲ自_ラ一
貫_{スト}焉。噫淳源難_レ尋_ネ、弊風易_レ起_リ。寧_ロ与_レ悟_{リハ}詩_ヲ孰_レ若_レ悟_{リハ}禪_ヲ、
寧_ロ与_レ學_レ文_ヲ孰_レ若_レ學_レ道_ヲ。予非_レ不_レ好_マ文_ヲ。欲_レシテナリ不_レ忘_レ其本_ニ也。

誠夫文於實相詩於靜慮則妙中之妙味外之味
自非生知恐不易到焉 和上大凡為詩為文不
用工夫不藉鍛鍊所遇即作任筆乃寫所以有其
精麗巧拙不相類者今所集錄詩文若干篇縱無
雄壯古雅之趣一字一句皆足以察於至情觀於
深思豈為非道德之餘華風教之遺韻於是編次
竊供吾黨之遊目云

正德第五龍飛乙未季冬下浣

慧曦拜題

妙極堂遺稿卷之一

侍者僧某等編錄

慶安三庚寅年 和上行年十二

試筆

不顧世間身山中少見人雲霞爭出海梅柳又迎春

全

過日載陽物色新風傳淑氣竹房春綿蠻黃鳥遷喬
木向此叢林須寄身

春日作

春日風和春水流簷前竹裏鳥啁啾暖蝶來難

誠夫文ニシテ於實相、詩ニスルハ於靜慮、則妙中ノ之妙、味外ノ之味、
自レハ非ニ生知ニ恐クハ不易ニ到リヲ。和上大凡為詩為文、不

用ニ工夫、不レ藉ニ鍛鍊、所ニシテ遇フチニ即作、任筆ニ乃シテ寫ス。所以ニ有リ其ノ

精麗巧拙不ニ相類ニ者上ノ。今所ニ集録スル詩文若干篇、縱ヒ無

雄壯古雅ノ之趣、一字一句皆ナリ足レリ以察ニ於至情、觀ルニ於

深思上。豈為レシヤ非ニ道德ノ之餘華、風教ノ之遺韻ニ。於是ニ編次シテ、

竊カニ供フ吾黨ノ之遊目ニ云。

正德第五龍飛乙未季冬下浣

慧曦拜題

妙極堂遺稿卷之一

侍者僧某等編錄

慶安三庚寅年 和上行年十二

試筆

不顧世間身 山中少見人 雲霞爭出海 梅柳又迎春

同

遲日載陽物色新 風伝淑氣竹房春 綿蠻黃鳥遷喬
木 向此叢林須寄身

春日作

春日風和春水流 簷前竹裏鳥啁啾 翩々暖蝶來難

去淡々寒雲行、不留

同

暮雲漠々、小橋、東、綠水、縈回、杳、靄中、長笛一聲、梅落盡、野、花、稱、意、亞、枝、紅

同五言五首

鳥啼、山、寂、寞、颺々起、松風、踏、翠、林、東、至、落、花、舞、陌、中

其二

楊柳滿山川、花光如白氈、寺前芳艸遍、碧色遠連天

其三

鶯聲聳竹外、柳色滿回塘、只憶東風夜、携花出洞房

去 淡々タル寒雲行テ不留

同

暮雲漠々タリ、小橋、東、綠水、縈回、杳、靄中、長笛一聲、梅落盡、野、花、稱、意、亞、枝、紅

同五言五首

鳥啼、山、寂、寞、颺々起、松風、踏、翠、林、東、至、落、花、舞、陌、中

其二

楊柳滿山川、花光如白氈、寺前芳草遍、碧色遠連天

其三

鶯聲聳竹外、柳色滿回塘、只憶東風夜、携花出洞房

其四

暖風吹艸香、詩夢到池塘、倚杖立松下、嶺頭已夕陽

其五

鶯啼小院東、燕入細楊中、古岳老松下、開窓聞晚風

春雨

春雨遠山暗、忽晴庭上乾、微雲含落日、高卧夢邯鄲

又

春日海南、雲、午時湖北、雨、漸晴無、点塵如此、少、今古

又

暮雨遍天涯、落華滿後階、細添和氣潤、風暖ニシテ鳥啾々

其四

暖風吹、草香、詩夢到、池塘、倚、杖、立、松下、嶺頭已夕陽

其五

鶯啼小院東、燕入細楊中、古岳老松下、開窓聞晚風

春雨

春雨遠山暗、忽晴庭上乾、微雲含落日、高卧夢邯鄲

又

春日海南、雲、午時湖北、雨、漸晴無、点塵、如此少、今古

又

暮雨遍天涯、落華滿後階、細添和氣潤、風暖ニシテ鳥啾々

春日

溪邊春事處々帶水流憶得東風夜閑吟獨倚樓

春夜

春宵一刻間新月在前山竹影橫窓見柴門竟不關

春雪

春雪忽成堆門庭礙往來寒鴉窓外噪隣彼不堪回

元夜

元宵新月圓佳景浩無邊池上寒冰合鐘聲到客船

山居 八首

青山歷々竹樓邊樹上雲烟又接天靜坐幽人松牖

暮砧聲暫罷啼鵲

其二

窈窕白雲居青松對草廬溪聲喧覺夢山色映簾疎

其三

地僻見人稀黃鶯出谷飛裁松林下立片々白雲歸

其四

松聲寒入戶芳艸出門蒼一夜落花雨蕭々斷我腸

其五

綠草滿南階白雲掛北崖竹深三逕合花影入空齋

其六

春日

溪邊春事幽々々々帶水流憶得東風夜閑吟獨倚樓

春夜

春宵一刻間新月在前山竹影橫窓見柴門竟不關

春雪

春雪忽成堆門庭礙往來寒鴉窓外噪隣彼不堪回

元夜

元宵新月圓佳景浩無邊池上寒冰合鐘聲到客船

山居 八首

青山歷々竹樓邊樹上雲烟又接天靜坐幽人松牖

暮砧聲暫罷啼鵲

其二

窈窕白雲居青松對草廬溪聲喧覺夢山色映簾疎

其三

地僻見人稀黃鶯出谷飛裁松林下立片々白雲歸

其四

松聲寒入戶芳艸出門蒼一夜落花雨蕭々斷我腸

其五

綠草滿南階白雲掛北崖竹深三逕合花影入空齋

其六

澗水乱山路。寂寥一草堂。雲霞侵岸柳。風雨洗苑央。

其七

我家隱翠微。松逕見人稀。開戶月先到。捲簾燕早歸。

其八

綠草生南畝。黃鶯鳴北窓。幽通溪上路。烟寺忽撞鐘。

秋日作八首

一

孤影隱幽山。閑雲常往來。沈吟依岸見。秋菊宛然開。

二

飛雲依峻嶺。落日下高岩。行見前村竹。雙燕語喃喃。

三

溪風朝入戶。山月夜侵門。移竹隴頭立。有人窺我園。

四

踏翠到山北。尋花遷水南。我思多日裏。煎茗聽松風。

五

竹風晚入家。松月夜侵門。鴉噪止庭樹。螢飛傍草園。

六七言

門前流水乱。蟬喧獨聽琴。聲遷竹村綠。暗紅稀山寂。清風隱々入吾園。

七

澗水乱山路。寂寥一草堂。雲霞侵岸柳。風雨洗苑央。

其七

我家隱翠微。松逕見人稀。開戶月先到。捲簾燕早歸。

其八

綠草生南畝。黃鶯鳴北窓。幽通溪上路。烟寺忽撞鐘。

秋日作八首

一

孤影隱幽山。閑雲常往來。沈吟依岸見。秋菊宛然開。

二

飛雲依峻嶺。落日下高岩。行見前村竹。雙燕語喃喃。

三

溪風朝入戶。山月夜侵門。移竹隴頭立。有人窺我園。

四

踏翠到山北。尋花遷水南。我思多日裏。煎茗聽松風。

五

竹風晚入家。松月夜侵門。鴉噪止庭樹。螢飛傍草園。

六七言

門前流水乱。蟬喧獨聽琴。聲遷竹村綠。暗紅稀山寂。清風隱々入吾園。

七

鬱葱松竹午風涼。掃地靜燒一炷香。開戶雙禽窺枕上。亂蟬又聽數聲長。

八

山中竹閣人稀到。傍岸依松景更清。倚檻遙聞一聲笛。到頭難寫此愁情。

春遊

白々紅々相雜。閑行々步々踏青來。隔林佇立聞鶯語。漠々春雲侵落梅。

春日訪人

春日訪人到翠微。園花窈窕鳥間閑。烹茶只語多年。

裏江北江南去復還

雨晴

林寂暖風度庭幽。冷雨沾晚春花尚在。嬌艷映疎簾。桃

春雲籬外兩三枝。灼々輝々鶯未知。可愛桃園發無主。艷紅一簇美樣奇。

晚春

漠々埜田秀麥多。凭欄唯見旅人過。黃鶯春暮無人識。宛轉一聲林外和。

落華

鬱葱松竹午風涼。掃地靜燒一炷香。開戶雙禽窺枕上。亂蟬又聽數聲長。

八

山中竹閣人稀到。傍岸依松景更清。倚檻遙聞一聲笛。到頭難寫此愁情。

春遊

白々紅々相雜。閑行々步々踏青來。隔林佇立聞鶯語。漠々春雲侵落梅。

春日訪人

春日訪人到翠微。園花窈窕鳥間閑。烹茶只語多年。

裏江北江南去復還

雨晴

林寂暖風度庭幽。冷雨沾晚春花尚在。嬌艷映疎簾。桃

春雲籬外兩三枝。灼々輝々鶯未知。可愛桃園發無主。艷紅一簇美樣奇。

晚春

漠々埜田秀麥多。凭欄唯見旅人過。黃鶯春暮無人識。宛轉一聲林外和。

落華

風急拂殘紅紛々飄点空山間渺茫處花底滿林中

春月

春月當樓滿微雲皎潔清五更登隴見花影已縱橫

梨花

春雨晚來晴始開樹上英李桃空落地只有此花清

送春

春晚疾於箭夜來听杜鵑韶光留不住相遇亦經年

夜坐

獨坐桂風清隔垣蟋蟀鳴夜來江上月時有白鷗輕

清明

風急拂殘紅紛々飄点空山間渺茫處花落滿林中

春月

春月當樓滿微雲皎潔清五更登隴見花影已縱橫

梨花

春雨晚來晴始開樹上英李桃空落地只有此花清

送春

春晚疾於箭夜來听杜鵑韶光留不住相遇亦經年

夜坐

獨坐桂風清隔垣蟋蟀鳴夜來江上月時有白鷗輕

清明

桃華灼々草蓊鬱燕子喃々蝶偶然細雨欲晴丘岳
暮人歌人笑釣魚船

牡丹

浥露初開小藥欄楊妃嬌艷耐相看天香已被蝶先
識玉蕊洗顏曉雨寒

燕子

三月春光媚翩々燕子忙栖簷身窈窕入幕語低昂

又

飛去竹林外日暖正呢喃銜泥尋舊主冒雨到巉岩
杜鵑

桃華灼々草蓊鬱燕子喃々蝶偶然細雨欲晴丘岳
暮人歌人笑釣魚船

牡丹

浥露初開小藥欄楊妃嬌艷耐相看天香已被蝶先
識玉蕊洗顏曉雨寒

燕子

三月春光媚翩々燕子忙栖簷身窈窕入幕語低昂

又

飛去竹林外日暖正呢喃銜泥尋舊主冒雨到巉岩
杜鵑

夢覺千山月一聲隔竹聞斷腸悲故國啼血入深雲

寫

春日遲々暖流雪滿上林穿華金谷晚織柳玉樓陽

又

柳上綿蠻語花間睨睨啼嬌柔吟倡北宛展入開西

春旅

村々農事忙倚杖听黃鶯孤障最高處白雲万里情

老鶯

落日熏風涼黃鶯啼樹林穿華調巧舌織柳弄佳音

夏日十七首

夢覺千山月一聲隔竹聞斷腸悲故國啼血入深雲

鶯

春日遲々暖流鶯滿上林穿華金谷晚織柳玉樓陽

又

柳上綿蠻語花間睨睨啼嬌柔吟倡北宛展入開西

春旅

村々農事忙倚杖听黃鶯孤障最高處白雲万里情

老鶯

落日熏風涼黃鶯啼樹林穿華調巧舌織柳弄佳音

夏日十七首

一 松風颯々出重林山鳥暮啼驚別心石竹花萎桃葉

落黃猿伴我澤邊吟

二

松風颯々亂山中落澗飛泉自宛然夏日得詩探美

景寒蟬慰我夕陽邊

三

蟬鳴鶴唳亂山中一逕竹疎生薰風門巷無人松牖

晚乃歛斷續釣魚翁

四

一 松風颯々出重林山鳥暮啼驚別心石竹花萎桃葉

落黃猿伴我沢辺吟

二

松風颯々亂山中落澗飛泉自宛然夏日得詩探美

景寒蟬慰我夕陽邊

三

蟬鳴鶴唳亂山中一逕竹疎生薰風門巷無人松牖

晚乃歛斷續釣魚翁

四

清風颺々滿山中^{上平}竹^上逕泉聲攪我眠
烹茗初知香色好
荷華度水鑑湖前

五

庭院沈々晝景長
青山綠樹亂蟬鳴
炎蒸不至軒窓裏
颺々松風一味清

六

庭院沈々夏簟清
榴花寂々笑薰風
數聲蟬噪綠陰密
一葉舟行碧浪中

七

吾舍白雲深
山中斜日陰
一庭梅子落
風滿四隣林

八

蟬鳴梅雨節
麥熟薰風時
只聽杜鵑語
呼名松樹枝

九

炎蒸今惡在一詠
又徜徉
唯見數竿竹
窗外自生涼

十

乘涼行樹下
避暑坐林間
閑味無餘事
終日對青山

十一

山家芳草深
避暑坐清陰
晴鵲喧林外
亂鶯有好音

十二

吟詩立竹庭
炎蒸懶看書
窓下暫高臥
泉聲聞靜居

清風颺々滿山中^{上平}竹^上逕泉聲攪我眠
烹茗初知香色好
荷華度水鑑湖前

五

庭院沈々晝景長
青山綠樹亂蟬鳴
炎蒸不至軒窓裏
颺々松風一味清

六

庭院沈々夏簟清
榴花寂々笑薰風
數聲蟬噪綠陰密
一葉舟行碧浪中

七

吾舍白雲深
山中斜日陰
一庭梅子落
風滿四隣林

八

蟬鳴梅雨節
麥熟薰風時
只聽杜鵑語
呼名松樹枝

九

炎蒸今惡在一詠
又徜徉
唯見數竿竹
窗外自生涼

十

乘涼行樹下
避暑坐林間
閑味無餘事
終日對青山

十一

山家芳草深
避暑坐清陰
晴鵲喧林外
亂鶯有好音

十二

吟詩立竹庭
炎蒸懶看書
窓下暫高臥
泉聲聞靜居

十三

地僻不羈人吟詩步水濱安眠松牖晚
寂々鳥聲新

十四

路險遇人稀閑居庭竹涼日長聞鳥雀
風遠見牛羊

十五

綠草滿三逕紅榴開一牆夕陽山水好
漁笛送昏黃

十六

夕陽雨後天候忽听山蟬蔽日陰々木
北窓風颯然

十七

足古詩後二句即古人句也

雨晴炎蒸忘鳥雀轉林塘流水竹三逕
清風琴一張

夏日朋友見訪

一客到來小院中樹陰烹茗洗襟胸
南風吹送炎蒸盡又見溪山千万重

夏雨

夏日忽陰雲霧暗雨降漸見洗青山
晚來新滿池塘水却思秋夜到人間

又

長空雲勢暗簾席自生凉冷々渾無暑
雨晴山色蒼

又

暑氣今何在檐聲次第鳴雨餘輕染碧
滿野竹風清

十三

地僻不看人吟詩步水濱安眠松牖晚
寂々鳥聲新

十四

路險遇人稀閑居庭竹涼日長聞鳥雀
風遠見牛羊

十五

綠草滿三逕紅榴開一牆夕陽山水好
漁笛送昏黃

十六

夕陽雨後天候忽听山蟬蔽日陰々木
北窓風颯然

十七

足古詩後二句即古人句也

雨晴炎蒸忘鳥雀轉林塘流水竹三逕
清風琴一張

夏日朋友見訪

一客到來小院中樹陰烹茗洗襟胸
南風吹送炎蒸盡又見溪山千万重

夏雨

夏日忽陰雲霧暗雨降漸見洗青山
晚來新滿池塘水却思秋夜到人間

又

長空雲勢暗簾席自生凉冷々渾無暑
雨晴山色蒼

又

暑氣今何在檐聲次第鳴雨餘輕染碧
滿野竹風清

夏日晚步

晚景寒蟬催旅人偶遊江外寄行蹤
薰風吹散夏天遠只見池邊柳影重

又

落日微風涼似水偶遊江外望寒空
寺樓倒影閑庭上漁航歸家烟雨中

夏日書懷

夏日炎蒸倦讀書宛如庭上白葵花
山光水色供吟望旦喜涼風入我家

睡起

睡起

睡起北窓下悠悠不見人
日高夢雖作庭樹鳥聲頻
村居足古人句

籬落生孫竹門庭上女蘿
縱橫一徑水野客荷鋤過
漁翁聞笛

遙聞雲外笛樓上一聲低
魚躍月昏昧龍吟風慘淒
獨坐

獨坐竹風清四隣無語聲
靜看斜日早柳影已縱橫
登江山

千峯人不見万木入雲高
踏翠過湖北山蟬隔水蹄

夏日晚步

晚景寒蟬催旅人偶遊江外寄行蹤
薰風吹散夏天遠只見池邊柳影重

又

落日微風涼似水偶遊江外望寒空
寺樓倒影閑庭上漁航歸家烟雨中

夏日書懷

夏日炎蒸倦讀書宛如庭上白葵花
山光水色供吟望旦喜涼風入我家

睡起

睡起

睡起北窓下悠悠不見人
日高夢雖作庭樹鳥聲頻
村居足古人句

籬落生孫竹門庭上女蘿
縱橫一徑水野客荷鋤過
漁翁聞笛

遙聞雲外笛樓上一聲低
魚躍月昏昧龍吟風慘淒
獨坐

獨坐竹風清四隣無語聲
靜看斜日早柳影已縱橫
登江山

千峯人不見万木入雲高
踏翠過湖北山蟬隔水蹄

山行

數峰記牛跡一路遶羊腸
万木常含霧風吹沾我裳

竹

庭上數竿竹含風夏簟涼
扶疎傲霜雪勁直出宮牆

松

百尺鬱蒼松嶙峋蟠臥龍
暑天風瑟瑟靜夜月溶溶

山行

松竹翠相連鴉鳴日暮天
山々踏之過芳草滿溪邊

又

奇峰矗矗新州綠不看人
樵徑莓苔滿吟行寂寞濱

江上夜行

水月共清澄浮江採紫菱
鳥啼秋夜曉風戰滅孤燈

江山

依々帆勢輕杳々笛聲幽
万水千山遠竹窓五月秋

全

蘚侵一徑青吟步日中庭
犬吠竹籬靜蘆花白滿汀

全

幽居人不來松月下庭隅
水碧風鳴樹山青影映湖

全

風吹正飄々江聲帶雨潮
得詩駭黃鳥避暑坐山橋

山行

數峰記牛跡一路遶羊腸
万木常含霧風吹沾我裳

竹

庭上數竿竹含風夏簟涼
扶疎傲霜雪勁直出宮牆

松

百尺鬱蒼松嶙峋蟠臥龍
暑天風瑟瑟靜夜月溶溶

山行

松竹翠相連鴉鳴日暮天
山々踏之過芳草滿溪邊

又

奇峰矗矗新草綠不看人
樵徑莓苔滿吟行寂寞濱

江上夜行

水月共清澄浮江採紫菱
鳥啼秋夜曉風戰滅孤燈

江山

依々帆勢輕杳々笛聲幽
万水千山遠竹窓五月秋

同

蘚侵一徑青吟步日中庭
犬吠竹籬靜蘆花白滿汀

同

幽居人不來松月下庭隅
水碧風鳴樹山青影映湖

同

風吹正飄々江聲帶雨潮
得詩駭黃鳥避暑坐山橋

秋夜即景

露降河漢高秋月益輝々此景無人識雁鴻向晚飛

秋夜

滿院秋蚊睡不成手携團扇自吟行西風吹去曉霜重
重州裏啼蛩四五聲

中秋對月

秋夜月無陰蛩聲助我吟西風既滿院坐見四隣林

秋日即景

山庵風力涼百舌唱回塘吟步中庭立鐘聲帶夕陽

秋日獨吟

山中秋日少人聲百舌交鳴助我情薄暮聞鐘庭上立
黃猿時亦泚泚行

對月聞鐘

對月雲邊見鴈飛蛩聲唧々草茸々五更披戶山間步
溪上遙聞精舍鐘

落葉

落葉隨風飄々空夕陽烹茗坐聞鐘雲高水遠無人境
片々題詩秋意濃

秋晴

雨晴滿地自無塵籬菊^花開月色新宿鳥^忽鳴天欲晚山

秋夜即景

露降河漢高秋月益輝々此景無人識雁鴻向晚飛

秋夜

滿院秋蚊睡不成手携團扇自吟行西風吹去曉霜重
重草裏啼蛩四五聲

中秋對月

秋夜月無陰蛩聲助我吟西風既滿院坐見四隣林

秋日即景

山庵風力涼百舌唱回塘吟步中庭立鐘聲帶夕陽

秋日獨吟

山中秋日少人聲百舌交鳴助我情薄暮聞鐘庭上立
黃猿時亦泚泚行

對月聞鐘

對月雲邊見雁飛蛩聲唧々草茸々五更披戶山間步
溪上遙聞精舍鐘

落葉

落葉隨風飄点空夕陽烹茗坐聞鐘雲高水遠無人境
片々題詩秋意濃

秋晴

雨晴滿地自無塵籬菊花開月色新宿鳥忽鳴天欲晚山

間茅屋一閑人

暮鐘

春林露重暗栖鴉
爲々暮鐘帶薄霞
禪起幽懷無處
寫數聲和月入吾家

餞人

風吹落葉向雲飛
不忍秋歸汝亦歸
今日送時先對
菊奈何三逕住人稀

送行

孟冬風冷少行人
送別愁深淚沾巾
想得夜闌更秉
燭詩窓得字競尖新

初冬

小院烹茶意益安
竹樓對月倚欄干
雁飛南浦砧聲
斷船滿前江霜色寒

冬至

活火煎茶夜五更
霜松雪竹北風清
數來功業一年
事茅屋雞鳴天欲明

冬夜即事

皚々門外綢繆雪
拭出柴扉天未明
餘得閑庭松樹
月影移深谷水中清
寒雀

間茅屋一閑人

暮鐘

春林露重暗栖鴉
隱々暮鐘帶薄霞
禪起幽懷無處
寫數聲和月入吾家

餞人

風吹落葉向雲飛
不忍秋歸汝亦歸
今日送時先對
菊奈何三逕住人稀

送行

孟冬風冷少行人
送別愁深淚沾巾
想得夜闌更秉
燭詩窓得字競尖新

初冬

小院烹茶意益安
竹樓對月倚欄干
雁飛南浦砧聲
斷船滿前江霜色寒

冬至

活火煎茶夜五更
霜松雪竹北風清
數來功業一年
事茅屋雞鳴天欲明

冬夜即事

皚々門外綢繆雪
拭出柴扉天未明
餘得閑庭松樹
月影移深谷水中清
寒雀

數千寒雀下空庭暫聚小梢受北風驚散忽然天欲
晚樓頭雪氣滿西東

江雪

風吹庭竹響雪降簷榴折獨處水邊僧暮山飛鳥絕

冬日探梅

竹杖探梅得々來溪邊山上幾徘徊暗香疎影和風
起淡傍寒村雪裏開

臘月梅

窈窕溪邊雪裏梅獨先春色竹間開小橋水靜風颼
颼可憫暗香引客來

慶安四辛卯年 行年十三

試筆

家々柳色一回新凍筆頻呵試早春庭樹只知陽氣
至黃鳥出谷到江濱

數千寒雀下空庭 暫聚小梢受北風 驚散忽然天欲
晚 樓頭雪氣滿西東

江雪

風吹庭竹響 雪降簷榴折 獨處水邊僧 暮山飛鳥絕

冬日探梅

竹杖探梅得々來 溪邊山上幾徘徊 暗香疎影和風
起 淡傍寒村雪裏開

臘月梅

窈窕溪邊雪裏梅 獨先春色竹間開 小橋水靜風颼
颼 可憫暗香引客來

慶安四辛卯年 行年十三

試筆

家々柳色一回新 凍筆頻呵試早春 庭樹只知陽氣
至 黃鳥出谷到江濱

客中春日

雲淡風輕驛路長
出門倚杖望家鄉
閑花芳草無人處
一別天涯淚萬行

聞笛

終日倚欄干
有人吹鐵笛
山川落照時
寒韻為誰憾

柳

獨步前村看柳樹
晚枝綠似隋堤
柴門深鎖黃鶯語
映渡臨橋暖日低

雪

獨捲翠簾看暮天
紛紛雪下遍山川
寒鴉暫集門前

客中春日

雲淡風輕驛路長
出門倚杖望家鄉
閑花芳草無人處
一別天涯淚萬行

聞笛

終日倚欄干
有人吹鐵笛
山川落照時
寒韻為誰憾

柳

獨步前村看柳樹
晚枝淺綠似隋堤
柴門深鎖黃鶯語
映渡臨橋暖日低

雪

獨捲翠簾看暮天
紛紛雪下遍山川
寒鴉暫集門前

柳小徑皚々貫白毡

初秋

火雲影裏井梧落
暑氣未除涼氣稀
幾度天高山遠處
閑行松逕夕陽微

竹

數竿翠竹勢如龍
潑灑秋容葉上濃
老節經霜誠可愛
春筍既破綠苔封

松風

鬱々蒼松千尺高
夜深蕭颯激狂濤
西窓幾度倚欄
見亂葉斷枝滿曲嶠

柳小徑皚々貫白氈

初秋

火雲影裏井梧落
暑氣未除涼氣稀
幾度天高山遠處
閑行松逕夕陽微

竹

數竿翠竹勢如龍
潑灑秋容葉上濃
老節經霜誠可愛
春筍既破綠苔封

松風

鬱々蒼松千尺高
夜深蕭颯激狂濤
西窓幾度倚欄
見亂葉斷枝滿曲嶠

中秋

蒼天已皎潔素月又嬋娟此景無人識閑吟汲石泉

又

中秋半夜一聲鐘万里天晴景色濃可惜玉蟾陰樹裏雪姿的皚到西峰

又

蕭颺西風竹裡斜十分月色遍天涯牧童菱草幽溪上倒騎老牛伴落霞

秋晚

西風度樹初籬菊映簾疎黃葉飄零晚紅紅滿我廬

中秋

蒼天已皎潔素月又嬋娟此景無人識閑吟汲石泉

又

中秋半夜一聲鐘万里天晴景色濃可惜玉蟾陰樹裏雪姿的皚到西峰

又

蕭颺西風竹裡斜十分月色遍天涯牧童菱草幽溪上倒騎老牛伴落霞

秋晚

西風度樹初籬菊映簾疎黃葉飄零晚紅紅滿我廬

山行

水遠路蜿蜒出村柳色黃听鶯江杏曲駐馬翠柳塘

畫竹

屏上數竿竹橫斜疑有聲臨風枝不動逢雪葉無傾

枇杷

五月北山陰枇杷正滿林枝枝追日熟摘盡一株金

百舌

百舌飛過一樹中間闌宛展語相同易聲緘口總無事唯向東風窈落紅

送別

山行

水遠路蜿蜒出村柳色黃听鶯江杏曲駐馬翠柳塘

畫竹

屏上數竿竹橫斜疑有聲臨風枝不動逢雪葉無傾

枇杷

五月北山陰枇杷正滿林枝枝追日熟摘盡一株金

百舌

百舌飛過一樹中間闌宛展語相同易聲緘口總無事唯向東風窈落紅

送別

林橋西路雨初晴日暖風和馬足輕
迤邐故鄉千里
別恨聽漁笛復愁情

葵花

庭前泥雨開乘興故人來
爛熳向紅日參差映碧苔

雞冠華

雞冠輕染丹高出貌崢嶸
風動影如闌雨餘勢欲鳴

五月菊花

紫艷先秋發層層遠檻濃
行吟三逕裏聞徹晚林鐘

楊梅

五月薰風起楊梅已滿林
纍纍光似玉顆顆色如金

杏

信脚到南園壓枝杏實繁
風前紅臉麗雨後絳膚暖

梅

四月空山路風前見黃梅
壓枝能結子含露落蒼苔

夏雨

万木雲深隱數峯雨尚傍
總无三伏暑只有一天涼

砧杵

山庵寂々竹風寒何處清砧搗
夜闌想得月斜疎響

續丁東聲到翠峰巒

夏日訪僧

林橋西路雨初晴日暖風和馬足輕
迤邐故鄉千里
別恨聽漁笛復愁情

葵花

庭前泥雨開乘興故人來
爛熳向紅日參差映碧苔

雞冠華

雞冠輕染丹高出貌崢嶸
風動影如闌雨餘勢欲鳴

五月菊花

紫艷先秋發層層遠檻濃
行吟三逕裏聞徹晚林鐘

楊梅

五月薰風起楊梅已滿林
纍纍光似玉顆顆色如金

杏

信脚到南園壓枝杏實繁
風前紅臉麗雨後絳膚暖

梅

四月空山路風前見黃梅
壓枝能結子含露落蒼苔

夏雨

万木雲深隱數峯雨尚傍
總无三伏暑只有一天涼

砧杵

山庵寂々竹風寒何處清砧搗
夜闌想得月斜疎響

續丁東聲到翠峰巒

夏日訪僧

夏日尋僧入翠微
寒蟬亂噪多陽天
世緣不識數年
裡雲影悠悠古木邊

訪友不遇

茅屋清溪曲
回頭日已斜
躊躇尋不見
漠漠暗雲霞

重陽

倚欄靜見野雲忙
吟罷登高逸興長
亂葉蕭蕭千壑
裡無人對菊自吹香

秋日偶成

雲藏斷岸樹蒼蒼
閑對晴蘭逸興長
水遶疎林天欲
晚澹然黃菊自吹香

秋夜偶題 三首

竹外高樓十二欄
月明風靜夜將闌
只看唳鶴留深
樹霜白滿天向曉寒

全

蕭蕭落葉古垣外
唧唧啼蛩幽草中
坐對孤螢吟對
月數聲砧杵搗清風

全

梧葉天高暑氣收
參差雁影一天秋
西風蕭瑟鳴窓
外何處寒砧增客愁

秋山

夏日尋僧入翠微
寒蟬亂噪多陽天
世緣不識數年
裡雲影悠悠古木邊

訪友不遇

茅屋清溪曲
回頭日已斜
躊躇尋不見
漠漠暗雲霞

重陽

倚欄靜見野雲忙
吟罷登高逸興長
亂葉蕭蕭千壑
裡無人對菊自吹香

秋日偶成

雲藏斷岸樹蒼蒼
閑對晴蘭逸興長
水遶疎林天欲
晚澹然黃菊自吹香

秋夜偶題 三首

竹外高樓十二欄
月明風靜夜將闌
只看唳鶴留深
樹霜白滿天向曉寒

同

蕭蕭落葉古垣外
唧唧啼蛩幽草中
坐對孤螢吟對
月數聲砧杵搗清風

同

梧葉天高暑氣收
參差雁影一天秋
西風蕭瑟鳴窓
外何處寒砧增客愁

秋山

溪：寒烟鎖翠微一行新雁向南飛嵯峨喬木秋風裏
裏溪鳥翩翩喚婦歸

秋夜偶作

露下閑江秋水清寒燈對枕夜三更魚龍寂寞霜砧
冷松竹風高亂葉鳴

暮秋

閑步採芙蓉仙人遊意濃冷々庵後水鬱々嶺頭松

又

路險雲霞覆園幽橘柚重
楚塘蘆荻動遙听暮天鐘
初冬

白鷗夾岸飛殘菊半依稀
淅々風生砌輝々月照扉

冬夜

凜風欲破肌寒月半垣移火盛煨芋熟悲笳且休吹

雪中偶作

乘興開門戶雪花枯木華寒汀盡平白整々又斜々

山寺

青山影裏塔重々松徑斜通碧蘚封日落門庭人不
見隔溪聞徹一聲鐘

江亭

万里碧江万里天風搖蘆葦鷺翩々水紋正映石漲

漠々寒烟鎖翠微一行新雁向南飛嵯峨喬木秋風裏
裏溪鳥翩翩喚婦歸

秋夜偶作

露下閑江秋水清寒燈對枕夜三更魚龍寂寞霜砧
冷松竹風高亂葉鳴

暮秋

閑步採芙蓉仙人遊意濃冷々庵後水鬱々嶺頭松

又

路險雲霞覆園幽橘柚重
楚塘蘆荻動遙听暮天鐘
初冬

白鷗夾岸飛殘菊半依稀
淅々風生砌輝々月照扉

冬夜

凜風欲破肌寒月半垣移火盛煨芋熟悲笳且休吹

雪中偶作

乘興開門戶雪花枯木華寒汀盡平白整々又斜々

山寺

青山影裏塔重々松徑斜通碧蘚封日落門庭人不
見隔溪聞徹一聲鐘

江亭

万里碧江万里天風搖蘆葦鷺翩々水紋正映石漲

處獨倚欄干見暮烟

牧童

携笠去茫茫、山原碧草長歸來明月夜橫笛幾摧腸

雪

夜深萬籟寂無聲曉光滿庭一樣清好是前山奇絕處
西松壓竹散瑤瓊

悼筆工婦

茫茫青壁變淒涼玉樹忽凋昨夜霜幾許愁魂招不
得西樓風雨恨盈床

冬夜

處 獨倚欄干見暮烟

牧童

携笠去茫茫 山原碧草長 歸來明月夜 橫笛幾摧腸

雪

夜深萬籟寂無聲 曉光滿庭一樣清 好是前山奇絕處
西松壓竹散瑤瓊

悼筆工婦

茫茫青壁變淒涼 玉樹忽凋昨夜霜 幾許愁魂招不
得 西樓風雨恨盈床

冬夜

庭院深々夜已闌簷花細雨亦生寒一枝梅影橫窓
戶霜月嬋娟意自殘

探梅

日々溪邊逸興催今朝忽見一枝開清香素影總春
意勾引詩人去却來

梅

寒雲籬落一枝開想得羅浮山下來只有暗香通淡
月更無俗態雜黃埃

又

忽見寒梅樹開花和暖新色濃幽嶂月香散遠林春

庭院深々夜已闌 簷花細雨亦生寒 一枝梅影橫窓

戶 霜月嬋娟意自殘

探梅

日々溪邊逸興催 今朝忽見一枝開 清香素影總春
意 勾引詩人去却來

梅

寒雲籬落一枝開 想得羅浮山下來 只有暗香通淡
月 更無俗態雜黃埃

又

忽見寒梅樹 開花和暖新 色濃幽嶂月 香散遠林春

又

牆角一枝梅耐寒特地開
蝶窺紅色去風送暗香來
冬日寄南山舊友

全

料識寒窓下君今詩可題
悠揚年欲晚風物又淒淒
前年一別宋無書迢遞思
雪餘且喜明朝通尺素
寒雲藹藹月疎々

和智昌冬日漫興作

落日千山靜冬溫蝶自知
娟々霜雪蕊挺々歲寒枝
不用仙吹火只思人奏簾
昏鴉歸遠嶂欄角立多時

又

牆角一枝梅耐寒特地開
蝶窺紅色去風送暗香來
冬日寄南山旧友

同

料識寒窓下君今詩可題
悠揚年欲晚風物又淒淒
前年一別寂無書迢遞思
雪餘且喜明朝通尺素
寒雲藹藹月疎々

和智昌冬日漫興作

落日千山靜冬溫蝶自知
娟々霜雪蕊挺々歲寒枝
不用仙吹火只思人奏簾
昏鴉歸遠嶂欄角立多時

寄南山老師

一瓶一鉢是生涯事々無心度歲華
入定談空塵不染
老師神氣似梅花

夜雪 四首

寒鴉啼噪遶疎林一夜漫々白雪深
拆竹聲中多感慨
挑燈把筆寫新吟
冬夜月明閑有餘雪花剪水響疎々
地爐火暖寒燈少
六出照牕宜讀書

除夕 三首

除夜圍爐至二更料知春氣上梅莖
孤燈影映小瓶

寄南山老師

一瓶一鉢是生涯事々無心度歲華
入定談空塵不染
老師神氣似梅花

夜雪 二首

寒鴉啼噪遶疎林一夜漫々白雪深
拆竹聲中多感慨
挑燈把筆寫新吟
冬夜月明閑有餘雪花剪水響疎々
地爐火暖寒燈少
六出照牕宜讀書

除夕 三首

除夜圍爐至二更料知春氣上梅莖
孤燈影映小瓶

水隔壁忽聞爆竹聲

又

院々燒燈如晝日
冉冉除夜似車輪
四更半過五更未
未到曉鐘不得春

又首尾吟

爆竹聲乾欲曉天
寒牀獨坐不為眠
明春明日更經夜
爆竹聲乾欲曉天

宿山寺

一宿山中寺
烟嵐侵竹扉
霜鐘驚客夢
林鳥入僧衣

墨梅

下八首並詠畫圖

水隔壁忽聞爆竹聲

又

院々燒燈如晝日
冉冉除夜似車輪
四更半過五更未
未到曉鐘不得春

又首尾吟

爆竹聲乾欲曉天
寒牀獨坐不為眠
明春明日更經夜
爆竹聲乾欲曉天

宿山寺

一宿山中寺
烟嵐侵竹扉
霜鐘驚客夢
林鳥入僧衣

墨梅 下八首並詠畫圖

屏上數枝梅
娟々如有神
丹青粧粉色
芳蕊卜陽春

夜船月

悠々白鳥邊
夜月照漁船
回棹穿寒影
短篷壓麗娟

春雨

夜來春雨却堪聽
点滴淋漓透戶櫺
半濕李華濺荒野
始生芳草滿長汀

病貓

一箇病貓愁不常
斑々毛上怖風霜
炉辺眠重懶漁獵
飢鼠二三穿竹牆

雪峰落照

屏上數枝梅
娟々如有神
丹青粧粉色
芳蕊卜陽春

夜船月

悠々白鳥邊
夜月照漁船
回棹穿寒影
短篷壓麗娟

春雨

夜來春雨却堪聽
点滴淋漓透戶櫺
半濕李華濺荒野
始生芳草滿長汀

病貓

一箇病貓愁不常
斑々毛上怖風霜
炉辺眠重懶漁獵
飢鼠二三穿竹牆

雪峰落照

天低風靜景無窮
門外雪峰落照紅
玉樹斜懸幽谷
上瓊林相映暮雲中

乘閑翁

寂寞翠簾不見人
日移花影稍應親
翩々蝶夢無求
處逸興悠々詩句新

又

乘閑意倍安逸興尚凭欄
竹間花疊々江上水漫々

竹間梅

吹面東風更不寒
竹間梅發對相看
到頭難寫孤山
景中有一花圖數竿

天低風靜景無窮
門外雪峰落照紅
玉樹斜懸幽谷
上瓊林相映暮雲中

乘閑翁

寂寞翠簾不見人
日移花影稍應親
翩々蝶夢無求
處逸興悠々詩句新

又

乘閑意倍安
逸興尚凭欄
竹間花疊々江上水漫々

竹間梅

吹面東風更不寒
竹間梅發對相看
到頭難寫孤山
景中有一花圖數竿

承應元壬辰年 行年十四

試筆

送暖東風一陳臻
晨輝韶々鳥聲新
妖紅嬾紫齊迎
日萬戶千門盡卜春

元旦

承應元壬辰年 行年十四

試筆

送暖東風一陳臻
晨輝韶々鳥聲新
妖紅嬾紫齊迎
日萬戶千門盡卜春

元旦

濕々和氣轉鴻鈞煦日發生滿目新絕景悠々人不識寒梅忽見一枝春

次智昌元旦韻

新歲山中空蕭然物外情閑華和日發芳艸受風生寒雁歸盡塞煖鶯囀荒城珍重喫茶去爐上紫烟輕

山居聞鶯

遲日載陽芳草生山居忽听數聲鶯林間恰々侵閑戶柳上嚶々弄晚晴

春日

華間蜂蝶弄春晴麗日光風柳眼明畫夢覺來無別

事關々鶯舌兩三聲

雨意

山上陰雲遶石根惱人天氣晝昏々先牽略約莫疑問只恐明朝雨覆盆

春行

朝記溪橋柳暮尋山路花吟行出郊野紅展一川霞

聯句 智昌空經兩吟

迎暖梅門賑昌鎖烟竹牖幽經吟肩先擔月昌望眼正凭樓經泉奏無絃曲昌市懸有酒甌經埋名彭澤亮昌明德象尼丘經仁路行應好昌儒筵學未休經

濕々和氣轉鴻鈞煦日發生滿目新絕景悠々人不識寒梅忽見一枝春

次智昌元旦韻

新歲山中空蕭然物外情閑華和日發芳草受風生寒雁歸幽塞煖鶯囀荒城珍重喫茶去炉上紫烟輕

山居聞鶯

遲日載陽芳草生山居忽听數聲鶯林間恰々侵閑戶柳上嚶々弄晚晴

春日

華間蜂蝶弄春晴麗日光風柳眼明画夢覺來無別

事 関々鶯舌兩三聲

雨意

山上陰雲遶石根惱人天氣晝昏々先牽略約莫疑問只恐明朝雨覆盆

春行

朝記溪橋柳暮尋山路花吟行出郊野紅展一川霞

聯句 智昌空經兩吟

迎暖梅門賑昌鎖烟竹牖幽經吟肩先担月昌望眼正凭樓經泉奏無絃曲昌市懸有酒甌經埋名彭澤亮昌明德象尼丘經仁路行應好昌儒筵學未休經

花紅蜂蝶鬧昌柳綠燕鶯啾經鐘報遠村寺昌笛殘
危岫郵經旅懷誰共語昌春興偶相遊經瑟瑟海棠
雨昌錚錚雞樹鸞經日高山影短昌天霽水光浮經
一釣消塵事昌六韜彰陳謀經立錐窓外笋昌噴錦
隴前榴經為暑築高閣昌乘涼浴細流經遁居常狎鹿
昌絕岸杏尋牛經古井拂苔汲昌清池採芰謳經露
沾征袖重昌冬至厚衣求經道朴民歌野昌政苛焚
論疇經偽朝人殍死昌勝地自夷猶經吟句卜瀟景
昌感牌過橘州經槐陰醒病骨昌松嶺豈衰頭經
劃尔飛鳴鶴昌咄哉癡兀鳩經微暄兒嚳背昌涌殿

花紅蜂蝶鬧昌柳綠燕鶯啾經鐘報遠村寺昌笛殘
危岫郵經旅懷誰共語昌春興偶相遊經瑟瑟海棠
雨昌錚錚雞樹鸞經日高山影短昌天霽水光浮經
一釣消塵事昌六韜彰陳謀經立錐窓外笋昌噴錦
隴前榴經為暑築高閣昌乘涼浴細流經遁居常狎鹿
昌絕岸杏尋牛經古井拂苔汲昌清池採芰謳經露
沾征袖重昌冬至厚衣求經道朴民歌野昌政苛焚
論疇經偽朝人殍死昌勝地自夷猶經吟句卜瀟景
昌感牌過橘州經槐陰醒病骨昌松嶺豈衰頭經
劃尔飛鳴鶴昌咄哉癡兀鳩經微暄兒嚳背昌涌殿

客凝眸經葉落封溪戶昌菊開堪暮秋經鱸肥鄉黨
近昌龍去洞仙愁經爐上諳寒苦昌室中談法猷經
春日聯句智昌惠隆空經對吟五十韻
寒盡得池景風和柳眼明經春來冒澗戶花發樹頭
清昌蝶袖遶園重昌鷗衣泛水輕經湖瀾天似洗昌
波動岸如行經日落漁迷浦昌國危帝築城經山家
梅點曆昌野寺藿充羹經累歲殘牌剝昌經年層塔
傾經空門禽謝寂昌荒畝鵲催耕經役業民勤月昌
歸裝客禱晴經別愁聽雨尚昌佳句放溝成經秋色
耽黃葉昌暖香嗅白櫻經遊糸隨處引昌幽漏應時

客凝眸經葉落封溪戶昌菊開堪暮秋經鱸肥鄉黨
近昌龍去洞仙愁經爐上諳寒苦昌室中談法猷經
春日聯句智昌惠隆空經對吟五十韻
寒盡得池景風和柳眼明經春來冒澗戶花發樹頭
清昌蝶袖遶園重昌鷗衣泛水輕經湖瀾天似洗昌
波動岸如行經日落漁迷浦昌國危帝築城經山家
梅點曆昌野寺藿充羹經累歲殘牌剝昌經年層塔
傾經空門禽謝寂昌荒畝鵲催耕經役業民勤月昌
歸裝客禱晴經別愁聽雨尚昌佳句放溝成經秋色
耽黃葉昌暖香嗅白櫻經遊糸隨處引昌幽漏應時

鳴經雪徑記人迹昌光陰憫老生經保常屏上槿昌
就睡檻前檉經鴉噪斜陽急昌雞呼品物亨經泉深
勞短綆昌夜久對長檠經知道雖窮巷昌乘涼入學
覺經文淵誰汲底昌筆海直難呈隆麥浪千原漲經
杏霞一氣宏隆舉杯馳鬱興昌持節致忠誠經報德
酬恩武昌卜凶占吉平經泥融苔滿地昌沙暖藻浮
泓經沿淺孤舟渡昌碣高双枕驚經破窓颼颼夕經廣
澤石嶂々經虎嘯脫雲帽昌鳥升掛曉鉦詩韻上晴雲開
絮帽樹頭初日掛銅鉦霧消峰卓犖昌朝朴世豐盈經戰罷狼
烟斷昌信傳鴈陳橫經木緋桃齊秀昌蕊素菊將采

鳴經雪徑記人迹昌光陰憫老生經保常屏上槿昌
就睡檻前檉經鴉噪斜陽急昌雞呼品物亨經泉深
勞短綆昌夜久對長檠經知道雖窮巷昌乘涼入學
覺經文淵誰汲底昌筆海直難呈隆麥浪千原漲經
杏霞一氣宏隆舉杯馳鬱興昌持節致忠誠經報德
酬恩武昌卜凶占吉平經泥融苔滿地昌沙暖藻浮
泓經沿淺孤舟渡昌碣高双枕驚經破窓颼颼夕經廣
澤石嶂々經虎嘯脫雲帽昌鳥升掛曉鉦詩韻上晴雲開
絮帽樹頭初日掛銅鉦霧消峰卓犖昌朝朴世豐盈經戰罷狼
烟斷昌信傳鴈陳橫經木緋桃齊秀昌蕊素菊將采

險棧皆振膝昌細流仄續聲經瓢中疎利祿昌爐
畔試新鐫經廢宅託飛鳥昌孟陬聞嘯鶯經閱書諳
往事昌把劍接威憐經語過賓朋散昌歛奔僮僕迎
經帶青淇澳竹昌洗綠太湖萍經開市徒翻掌昌歌
臺各寄情經至賢交會薄昌騷士逸懷縈經燒櫓忘
冬近昌愛蓮任瀾平經鶴啼仙洞頭昌鳳翥宦途貞
經感意終含筆昌孝廉豈遺贏經霜降木半熟昌瀑
酌茗方烹經慕舊梁間燕昌攪眠樓角鯨經炎蒸疑
坐甌昌溫籍耐圓杆經淚吹蘆招手昌江邊草沒名
經捲簾胸宇濶昌凭榻鼻雷轟經冰合魚難躍昌刻

險棧皆振膝昌細流仄續聲經瓢中疎利祿昌爐
畔試新鐫經廢宅託飛鳥昌孟陬聞嘯鶯經閱書諳
往事昌把劍接威憐經語過賓朋散昌歛奔僮僕迎
經帶青淇澳竹昌洗綠太湖萍經開市徒翻掌昌歌
臺各寄情經至賢交會薄昌騷士逸懷縈經燒櫓忘
冬近昌愛蓮任瀾平經鶴啼仙洞頭昌鳳翥宦途貞
經感意終含筆昌孝廉豈遺贏經霜降木半熟昌瀑
酌茗方烹經慕舊梁間燕昌攪眠樓角鯨經炎蒸疑
坐甌昌溫籍耐圓杆經淚吹蘆招手昌江邊草沒名
經捲簾胸宇濶昌凭榻鼻雷轟經冰合魚難躍昌刻

臻蝠作爭經尋芳吟遠嶂經見英賀元正昌防佚堯
階穩昌禁奢舜宙精經乍嵐塵撲面昌法界室開盲
經境塢馬蹄緩昌慇懃牛耳盟經垂蘿修略約昌厚
蘇擁彫甍經

呈庵室大和上翰

空經百拜謹白。嚮年二五之頃投乎悉地院主而祝
髮受具焉。自介以降苟仰風規屢蒙教授學經書已
乙歲未翌而過于古里父世寧而資助少而尋之無
師擇之無友孤陋寡聞而宛如狸如狐如禱机之類
碌々無能齒漸老去以為慙已雖然豈虛彌駒隙哉

臻蝠作爭經尋芳吟遠嶂經見英賀元正昌防佚堯
階穩昌禁奢舜宙精經乍嵐塵撲面昌法界室開盲
經境塢馬蹄緩昌慇懃牛耳盟經垂蘿修略約昌厚
蘇擁彫甍經

呈庵室大和上翰

空經百拜謹白。嚮年二五之頃投乎悉地院主而祝
髮受具焉。自介以降苟仰風規屢蒙教授學經書。已
乙歲未翌而過于古里。父世寧而資助少、而尋之無
師、択之無友。孤陋寡聞而宛如狸如狐如禱机之類、
碌々無能齒漸老去。以為慙已雖然豈虛彌駒隙哉。

古曰人而不學謂之視肉、學而不行謂之撮囊。信哉
此言也。無諸已而有諸人乎。僕一日傳承傍有人脅
肩諂笑而告老和尚曰、空經在鄉黨而孤員先生之
懿範離野山而乖高祖之鑑誠矣。吾聞人間私語天
聞如雷、暗室欺心神目如電。寔惟近來密宗之緇林、
躬闕法系心泥塵欲。加之自讚毀他為已之任也。慙
兮侗兮密乘之頽廢秘家之陵夷、職此之由是、呼方
袍之俗耶呼素服之僧耶。諺有之誠身有道不明乎
善不誠乎其身矣。是故誠者天之道也。思誠者人之
道也。至誠而不動者未之有也。又曰道也者不可須

古曰人而不學謂之視肉、學而不行謂之撮囊。信哉
此言也。無諸已、而有諸人乎。僕一日傳承傍有人。
脅肩諂笑而告老和尚曰、空經在鄉黨而孤員先生之
懿範離野山而乖高祖之鑑誠矣。吾聞人間私語天
聞如雷、暗室欺心神目如電。寔惟近來密宗之緇林、
躬闕法系心泥塵欲。加之自讚毀他為已之任也。慙
兮侗兮密乘之頽廢秘家之陵夷、職此之由是、呼方
袍之俗耶呼素服之僧耶。諺有之誠身有道不明乎
善不誠乎其身矣。是故誠者天之道也。思誠者人之
道也。至誠而不動者未之有也。又曰道也者不可須

史離也可離非道也是故君子戒慎乎其所不睹恐懼乎其所不聞儒者尚介何況佛者乎不慎其所不睹反而謗於其所不聞其過偉矣乎雖似毀佗人却汗已身也鳥寧知而故犯蓋夫波旬之儔乎弗揣機才略陳惡意且野詩一律附緒餘電囑惟辛

春日
漢々淡烟罩綠楊東風一陳艸華香蓮經讀罷無餘

事黃鳥數聲春日長

山行

迢遙斜徑二三里來往遠帆四五艘步壑登山多興
味微吟擁鼻野溪橋

又

獨入松杉深處落蒼龍佳木興無窮行遷溪上有精舍
舍古殿不曾与俗通

春晚

溪邊秀麥已田々鶯舌一聲听管絃蝴蝶不知春色
晚牡丹華下去聯翩

史離也可離非道也。是故君子戒慎乎其所、不睹恐

懼乎其所、不聞儒者尚介。何況仙者乎不慎其所、不

睹反而謗於其所、不聞其過偉矣乎。雖似毀佗人却汗

已身也。鳥寧知而故犯蓋夫波旬之儔乎。弗揣機才

略陳惡意、且野詩一律附緒餘電囑惟辛。

春日
漢々淡烟罩綠楊東風一陳草華香蓮經讀罷無餘

初謁南山二六春今還鄉里倚雙親一心閑處莫非

道万法空時自絕塵羅月松風皆實相溪禽野鹿是

春日

天真任他世上虛詼客於我些々不謗人

事黃鳥數聲春日長

山行

迢遙斜徑二三里來往遠帆四五艘步壑登山多興
味微吟擁鼻野溪橋

又

獨入松杉深處落蒼龍佳木興無窮行遷溪上有精舍
舍古殿不曾与俗通

春晚

溪邊秀麥已田々鶯舌一聲听管絃蝴蝶不知春色
晚牡丹華下去聯翩

三月盡

九十春光太耐怜
鳥啼華落思依然
從教韶景去不
住
夢裡分明在眼前

又

院落沈沈淚不乾
春光空作舊時看
風吹柳絮滿天
舞
黃鳥一聲獨倚欄

次惠隆公韻

欲度衆生迷倒者
至心讀誦大藏經
天龍八部常影
向
千歲豪英道德馨

寄友人

三月盡

九十春光太耐怜
鳥啼華落思依然
從教韶景去不
住
夢裡分明在眼前

又

院落沈沈淚不乾
春光空作舊時看
風吹柳絮滿天
舞
黃鳥一聲獨倚欄

次惠隆公韻

欲度衆生迷倒者
至心讀誦大藏經
天龍八部常影
向
千歲豪英道德馨

寄友人

杏華榆莢節遙賜一篇書
料得詩窓下逸興更有餘

夕陽眺望

吟詩倚檻窮望眼
蘆荻漫漫浸碧波
新雁飛邊秋水
闊
夕陽明處碧山多

廢宅

破屋頽垣盡日閑
幽華窈窕水潺湲
春光歸去無人
惜
獨立咨嗟涕淚潛

江山

青榕更蕭瑟
白鳥自浮沈
江月照牕冷
山雲帶屋深

山居

杏華榆莢節遙賜一篇書
料得詩窓下逸興更有餘

夕陽眺望

吟詩倚檻窮望眼
蘆荻漫漫浸碧波
新雁飛邊秋水
闊
夕陽明處碧山多

廢宅

破屋頽垣盡日閑
幽華窈窕水潺湲
春光歸去無人
惜
獨立咨嗟涕淚潛

江山

青榕更蕭瑟
白鳥自浮沈
江月照牕冷
山雲帶屋深

山居

地僻送迎少人家隱翠微晚蟬慰幽寂山鳥自依稀

初夏偶作

寒暄雨初晴古叢鶯亂鳴紅華辭樹落青筍穿苔生

其二

月郊琴韻冷風閣笛音清漁父江邊釣農夫塹外耕

其三

疎筍山入眼幽磬瀑添聲半檻牡丹白一庭芍藥明

其四

魚游溪口水鳥立岸頭啼惆悵春歸去漫天柳絮輕

夏夜

地僻送迎少人家隱翠微晚蟬慰幽寂山鳥自依稀

初夏偶作

寒暄雨初晴古叢鶯亂鳴紅華辭樹落青筍穿苔生

其二

月郊琴韻冷風閣笛音清漁父江邊釣農夫塹外耕

其三

疎筍山入眼幽磬瀑添聲半檻牡丹白一庭芍藥明

其四

魚游溪口水鳥立岸頭啼惆悵春歸去漫天柳絮輕

夏夜

清風院落月深沈避暑乘涼靜獨吟此景此時人不識宿鳴鳴噪集疎林

夏日

葵白葵秋日榴紅梅雨時得詩吟未了携杖倚疎籬

過山寺

峭々蒼壁一溪流緩步枯藜小徑幽峰頂依然僧寺在門前松樹掛獼猴

又

獨步入深寺莫鐘到處聞清冷溪澗下風起水生紋

夏日偶作

清風院落月深沈避暑乘涼靜獨吟此景此時人不

識宿鳴鳴噪集疎林

夏日

葵白葵秋日榴紅梅雨時得詩吟未了携杖倚疎籬

過山寺

峭々蒼壁一溪流緩步枯藜小徑幽峰頂依然僧寺在門前松樹掛獼猴

又

獨步入深寺莫鐘到處聞清冷溪澗下風起水生紋

夏日偶作

庵前滴々響清泉 蝶夢蟬吟自宛然
獨倚闌干窮望眼 白雲深處颺茶烟

機頌

洞然一物不離身 仔細覓獨自真
非悟非迷非去住 通凡通聖本來人

古渡

沙暖泥融古渡頭 行人爭走立芳洲
烟中一艇去何處 髣髴遠山是九洲

采薇

雨過前山笋蕨肥 携藍峭屨出紫扉
溪邊嫩綠太堪

食立聽疎鐘日影微

遊山

青嶂如畫黃鶯似管絃 登々入樵路決々聞溪泉
火雲

樹影遶欄干 奇雲變遠峰 如綿復如帽 磴兀帶喬松

早行

喚童促早行 野色未分明 樵路二三里 曉雞四五聲

又

細泉傍松滴 殘月掛林傾 僧寺在何處 隔溪鐘磬清
落葉

庵前滴々響清泉 蝶夢蟬吟自宛然 獨倚闌干窮望眼 白雲深處颺茶烟

機頌

洞然一物不離身 仔細覓獨自真 非悟非迷非去住 通凡通聖本來人

古渡

沙暖泥融古渡頭 行人爭走立芳洲 烟中一艇去何處 髣髴遠山是九洲

采薇

雨過前山笋蕨肥 携藍峭屨出紫扉 溪邊嫩綠太堪

食立聽疎鐘日影微

遊山

青嶂如畫黃鶯似管絃 登々入樵路決々聞溪泉
火雲

樹影遶欄干 奇雲變遠峰 如綿復如帽 磴兀帶喬松

早行

喚童促早行 野色未分明 樵路二三里 曉雞四五聲

又

細泉傍松滴 殘月掛林傾 僧寺在何處 隔溪鐘磬清
落葉

一夜空階雨蕭蕭、敲曲欄鷄鳴開戶見落葉滿山庭

秋日晚眺

江天新雨過秋水碧波浮遠見一行鴈聯翩下鷺洲

中秋

一輪明月照天寒華影重、映玉欄記得去年三五

夜今宵清景盡應難

訪僧不遇

尋僧入翠岫山上更安山烟州人歸晚柴扉晝日開

中秋

鴈飛幽塞上蛩聒古垣東月色十分滿詩情万里同

又

碧梧風剪々丹桂露濃々徹曉金粟冷餘光入綺櫺

秋夜旅舍即事

旅亭殘月曉新鴈一聲秋短笛催歸思寒砧淒客愁

霧

山間朝霧起海勢幾回驚自認松風響誤為波浪聲

寄友

賜我數行書報君一首詩勿忘雲雪業研幾俱攷々

秋夜風雨

大風龍出沒暴雨鳥喧呼前嶂老楠樹明朝恐有無

一夜空階雨蕭蕭、敲曲欄鷄鳴開戶見落葉滿山庭

秋日晚眺

江天新雨過秋水碧波浮遠見一行雁聯翩下鷺洲

中秋

一輪明月照天寒華影重々映玉欄記得去年三五

夜今宵清景盡應難

訪僧不遇

尋僧入翠巒山上更安山烟草人歸晚柴扉晝日開

中秋

雁飛幽塞上蛩聒古垣東月色十分滿詩情万里同

又

碧梧風剪々丹桂露濃々徹曉金粟冷餘光入綺櫺

秋夜旅舍即事

旅亭殘月曉新雁一聲秋短笛催歸思寒砧淒客愁

霧

山間朝霧起海勢幾回驚自認松風響誤為波浪聲

寄友

賜我數行書報君一首詩勿忘雲雪業研幾俱攷々

秋夜風雨

大風龍出沒暴雨鳥喧呼前嶂老楠樹明朝恐有無

觀心寺

山前依舊觀心寺林下新脩實慧堂
寂寞門庭人不見籬邊黃菊自吹香

秋夜

秋夜月無陰砌蛩草裏吟一聲孤雁晚
獨坐听寒砧

秋日

秋日少人到柴門晝掩閑丹楓映山際
黃菊遶籬間

同

幽僻不人見遠欄黃菊開春華又秋葉
歲月苦相催

秋夜

觀心寺

山前依旧觀心寺林下新脩實慧堂
寂寞門庭人不見籬邊黃菊自吹香

秋夜

秋夜月無陰砌蛩草裏吟一聲孤雁晚
獨坐听寒砧

秋日

秋日少人到柴門晝掩閑丹楓映山際
黃菊遶籬間

同

幽僻不人見遠欄黃菊開春華又秋葉
歲月苦相催

秋夜

秋夜獨凭欄照塔月色寒曉霜不堪冷
爐畔試龍團

山閣

獨立山中閣畫棟障半天崢嶸吞宇宙
突兀接雲烟

秋日即事

秋日多佳景獨吟步嶺東乱蟬鳴冷樹
老雁叫長空

九月梨華

清艷迷春色臨風九月開枝頭千点雪
潔白落成堆

山寺

雲深峰頂寺寂寞不令人籬下黃華發
林間紅葉新

松下軒即事

秋夜獨凭欄照塔月色寒曉霜不堪冷
爐畔試龍團

山閣

獨立山中閣畫棟障半天崢嶸吞宇宙
突兀接雲烟

秋日即事

秋日多佳景獨吟步嶺東乱蟬鳴冷樹
老雁叫長空

九月梨華

清艷迷春色臨風九月開枝頭千点雪
潔白落成堆

山寺

雲深峰頂寺寂寞不令人籬下黃華發
林間紅葉新

松下軒即事

松樹聳天當洞門松風洗耳坐松根吟臻日暮誰是
伴捫腹唯聞歸鶴喧

秋夜

天高征雁遠夜永砌蛩喧素魄一輪滿五更猶閉門

冬日即事

沙鴈二三字早梅一兩花煮茶汲前澗落日半林斜

冬夜首尾吟

月滿空庭水滿潭霜松雪竹鎖烟嵐梅華一朵無人
伴月滿空庭水滿潭

水仙花

水仙叢裡發点点吐芬芳清艷粧淡白水葩深嬾黃

冬日即事

晚景北風滿前溪水有聲爨烟起山麓照席月鉤明

牧童

獨携簑笠傍松立細雨蕭蕭晚未晴歌罷秣牛月明
夜歸未銑笛兩三聲

雪

冬日寒風徹骨清梅枝六出玉龍擎却思今夜書窓
下不用灯檠眼倍明

雪夜

松樹聳天當洞門松風洗耳坐松根吟臻日暮誰是
伴捫腹唯聞歸鶴喧

秋夜

天高征雁遠夜永砌蛩喧素魄一輪滿五更猶閉門

冬日即事

沙雁二三字早梅一兩花煮茶汲前澗落日半林斜

冬夜首尾吟

月滿空庭水滿潭霜松雪竹鎖烟嵐梅華一朵無人
伴月滿空庭水滿潭

水仙花

水仙叢裡發点点吐芬芳清艷粧淡白水葩深嬾黃

冬日即事

晚景北風滿前溪水有聲爨烟起山麓照席月鉤明

牧童

獨携簑笠傍松立細雨蕭蕭晚未晴歌罷秣牛月明
夜歸未銑笛兩三聲

雪

冬日寒風徹骨清梅枝六出玉龍擎却思今夜書窓
下不用灯檠眼倍明

雪夜

寒風剪々穿窓响 白雪蕭々散瓦鳴 凜冽徹肌不堪
冷圍爐睡起二三更

雪

杖藜緩步小樓東 六出紛紛飄點空 須臾白氈平席
地 瑤華瓊樹四玲瓏

全

雪降冬日曉 整々遍前崖 因憶山陰夜 乘興訪戴逵

除夕

荏苒一年盡 崢嶸四季終 圍爐听爆竹 逸興自天窮

探梅

探梅綠水傍 日々冒雲回 玉骨傳春信 數枝雪裡開

冬夜

携枕就床睡 忽然曉夢驚 蕭々蒼筑颺 寒韻月中清

雲

來去嶺頭雲 紛紛舐石飛 傍華籠夜月 覆苑濕行衣

登樓即事

獨上高樓思寂寥 飛棟突兀見凌霄 寒鴉閃々青山

近 晚樹悠々白水遙

冬暖如春

青笋三冬出 紅桃臘裏開 山頭梅裁玉 溪畔柳抽枚

寒風剪々穿窓响 白雪蕭々散瓦鳴 凜冽徹肌不堪
冷 圍爐睡起二三更

雪

杖藜緩步小樓東 六出紛紛飄點空 須臾白氈平席
地 瑤華瓊樹四玲瓏

同

雪降冬日曉 整々遍前崖 因憶山陰夜 乘興訪戴逵

除夕

荏苒一年盡 崢嶸四季終 圍爐听爆竹 逸興自天窮

探梅

探梅綠水傍 日々冒雲回 玉骨傳春信 數枝雪裡開

冬夜

携枕就床睡 忽然曉夢驚 蕭々蒼筑颺 寒韻月中清

雲

來去嶺頭雲 紛紛舐石飛 傍華籠夜月 覆苑濕行衣

登樓即事

獨上高樓思寂寥 飛棟突兀見凌霄 寒鴉閃々青山

近 晚樹悠々白水遙

冬暖如春

青笋三冬出 紅桃臘裏開 山頭梅裁玉 溪畔柳抽枚

病中作

衰客懶步行自掛藥鐺烹爐畔睡眠裏忽聞狗吠聲

傀儡

牽絲爭體態刻木作機關窈窕巧歌舞綠裳兼翠鬢

見棋

布陳鬪鴉鷺解圍決死生局終人不見寂寞對空枰

山居

幽僻不人見高眠離市闌猿啼青嶂裏犬吠白雲間

江行

舳閣連霄生柴門竟日閑悠然高詠外徐步獨登山

病中作

衰客懶步行自掛藥鐺烹爐畔睡眠裏忽聞狗吠聲

傀儡

牽絲爭體態刻木作機關窈窕巧歌舞綠裳兼翠鬢

見棋

布陳鬪鴉鷺解圍決死生局終人不見寂寞對空枰

山居

幽僻不人見高眠離市闌猿啼青嶂裏犬吠白雲間

江行

舳閣連霄坐柴門竟日閑悠然高詠外徐步獨登山

夜行清江上塞雁自翩翩掉礪壺中月船侵鏡底天

山猿驚曉夢水鳥駭秋眠平岸蒹葭戰佳興見浩然

題高野山

山上幾精舍山僧時續經山間看柳綠山色疊藍青

雪

山口童牧馬山腰鳥听霆山鶯歌杙木山澗水冷冷

片片夜來雪千山皆潔白杖藜信脚行路傍見牛跡

夜行清江上塞雁自翩翩掉礪壺中月船侵鏡底天

山猿驚曉夢水鳥駭秋眠平岸蒹葭戰佳興見浩然

題高野山

山上幾精舍山僧時續經山間看柳綠山色疊藍青

雪

山口童牧馬山腰鳥听霆山鶯歌杙木山澗水冷冷

片片夜來雪千山皆潔白杖藜信脚行路傍見牛跡

承應二癸巳年 行年十五

元日二首

元正啓祚物候新一兩聲鶯精舍春沙煖泥融花也
發滿天淑氣轉鴻鈞

同

春臻斗柄東吹面受和風芳艸齊青綠野華稱意紅

春日即事

早春逸興催携杖幾徘徊日暖遷鶯語風和過雁回

春夜即興三首

緩步杖藜踏雪封庵前溪畔忽听鐘嶺頭凡物事殊

承應二癸巳年 行年十五

元日二首

元正啓祚物候新一兩聲鶯精舍春沙煖泥融花也
發滿天淑氣轉鴻鈞

同

春臻斗柄東吹面受和風芳草齊青綠野華稱意紅

春日即事

早春逸興催携杖幾徘徊日暖遷鶯語風和過雁回

春夜即興三首

緩步杖藜踏雪封庵前溪畔忽听鐘嶺頭風物淒涼

處月在梅梢第幾重

全

門前柳樹更鮮穠溪上宿烟似酒濃今夜山庭無限
興梅華疎影月溶溶

全

春夜勝遊爭伎藝圍碁排陳且論詩五更睡覺燈檠
下坐客胡盧語鬱伊

春寒

春寒花發遲坐久掩柴扉薄暮開門戶紛紛白雪飛
雪

處月在梅梢第幾重

同

門前柳樹更鮮穠溪上宿烟似酒濃今夜山庭無限
興梅華疎影月溶溶

同

春夜勝遊爭伎藝圍碁排陳且論詩五更睡覺燈檠
下坐客胡盧語鬱伊

春寒

春寒花發遲坐久掩柴扉薄暮開門戶紛紛白雪飛
雪

作堆春日雪却恐庭窄折腰柳自徘徊傍花更凝闕

又

鶯鳴春夢驚六出照窓明因見村犬走又聞折竹聲

麥

晚春秀麥多穗々晚風抽隴上黃雲鋪畦中碧浪浮

春興

燕忙千柳裏鶯囀百華群日暖山如染風輕草欲薰

花八首

花盛遶籬東蝶蜂逐暖風妖紅三四朵艷紫百千叢

其二

作堆春日雪却恐庭榕拆 庄柳自徘徊 傍花更凝闕

又

鶯鳴春夢驚 六出照窓明 因見村犬走 又聞折竹聲

麥

晚春秀麥多 穗々晚風抽 隴上黃雲鋪 畦中碧浪浮

春興

燕忙千柳裏 鶯囀百華群 日暖山如染 風輕草欲薰

花八首

花盛遶籬東 蝶蜂逐暖風 妖紅三四朵 艷紫百千叢

其二

萼發已茸々 胭脂帶露濃 風前吐芬馥 雨後浥春容

其三

花發如圖畫 倩香信少雙 空堦斜日後 疎影上紗窓

其四

華盛蝶蜂窺 深叢一段奇 帳蒙連日賞 爛熳粉盈枝

其五

朝露待陽晞 花多樹葉稀 幾叢塵外種 鶯燕弄芳菲

其六

數朵種庭除 素容雪不如 接枝偷造化 圍繞影扶疎

其七

萼發已茸々 胭脂帶露濃 風前吐芬馥 雨後浥春容

其三

花發如圖畫 清香信少雙 空堦斜日後 疎影上紗窓

其四

華盛蝶蜂窺 深叢一段奇 帳蒙連日賞 爛熳粉盈枝

其五

朝露待陽晞 花多樹葉稀 幾叢塵外種 鶯燕弄芳菲

其六

數朵種庭除 素容雪不如 接枝偷造化 圍繞影扶疎

其七

其八

一樹秀牆隅，枝々葉有無。爛熳羅綺裏，嬾蕊上蜂鬚。

探華

丹青滿野萋，嫩枝低竟日。緣相見，眼窮必欲迷。

春夜

春日獨尋華，清香自水涯。衙蜂爭嚙蕊，黃鳥又啾々。
東風傳暖入荒園，柳上竹間宿鳥喧。手把楸花嗔步
處，冰盤轉出影移軒。

春日

暖風和春日，閑數聲黃鳥自閑々。牡丹花發太堪

愛也，以長繩縛矮欄。

春雨

一犁春雨濕潤物，正霏々砌下楸花落。溪邊柳絮飛
慧隆首座有祭春日之詩，厥文心精辭綺而

爛然，可見予吟唱無倦，雖無根核之深租，承

光誦之末選。

春日祭嘗陳俎豆，洽布恩澤及生民。立看妙舞柳間
客，爭聞清歌池畔人。羽袖蹁躚雲幙隔，鶴裘宛轉雪

衫新。樽疊幣帛威儀整，道路捧華拜鬼神。
和慧堅雅丈元旦韻并序

其八

一樹秀牆隅，枝々葉有無。爛熳羅綺裏，嬾蕊上蜂鬚。

探華

丹青滿野萋，暈々嫩枝低。竟日緣相見，眼窮必欲迷。

春夜

春日獨尋華，清香自水涯。衙蜂爭嚙蕊，黃鳥又啾々。

東風伝暖入荒園，柳上竹間宿鳥喧。手把楸花嗔步

處，冰盤轉出影移軒。

春日

暖風和春日，閑數聲黃鳥自閑々。牡丹花發太堪

愛也，以長繩縛矮欄。

春雨

一犁春雨濕潤物，正霏々砌下楸花落。溪邊柳絮飛
慧隆首座有祭春日之詩。厥文心精辭綺而

爛然，可見予吟唱無倦，雖無根核之深租，承

光誦之末選。

春日祭嘗陳俎豆，洽布恩澤及生民。立看妙舞柳間
客，爭聞清歌池畔人。羽袖蹁躚雲幙隔，鶴裘宛轉雪

衫新。樽疊幣帛威儀整，道路捧華拜鬼神。
和慧堅雅丈元旦韻并序

昔日一別，宗無音驛，而今得書及元旦詩一篇，吁
曠如復面，喜躍何息其詩也。金韻玉聲，良令人驚
也。予終日吟翫，展卷數回，弁弊墨渝，猶不離手焉。
且惟永納篋笥，以為後采耳。雖愧襤才污嚴韻云。

密丐慈介

樹頭黃鳥弄新紅，一夜韶光滿眼濃。殘雪粘枝春詠
饒，燒痕茁綠天恩隆。寺中緇侶拜尊，獨禁裡公卿祝
聖躬。華檻梅窓日晴後，散漫楚鳥舞青空。

竹軒

寂寞竹軒裏，凄清秋夜長。掃風簾櫳冷，篩月几席涼。

春日即景

日暖風和花氣清，得詩吟句賞春晴。圍棋道者笑相
語，樓上丁丁飛玉聲。

又

信脚吟行一杖藜，芒鞋踏遍埜橋西。郊原處處多春
意，楊柳淺深鶯亂啼。

又

芳艸池塘浮日光，獨書好句入奚囊。樹陰布地黃鸝
語，蝶夢覺來春晝長。

圍棋

昔日一別，寂無音驛，而今得書及元旦詩一篇。吁

曠如復面，喜躍何息其詩也。金韻玉聲，良令人驚

也。予終日吟翫，展卷數回，回紙弊墨渝，猶不離手焉。

且惟永納篋笥，以為後采耳。雖愧襤才污嚴韻云。

密丐慈介。

樹頭黃鳥弄新紅，一夜韶光滿眼濃。殘雪粘枝春詠
饒，燒痕茁綠天恩隆。寺中緇侶拜尊，獨禁裡公卿祝
聖躬。華檻梅窓日晴後，散漫楚鳥舞青空。

竹軒

寂寞竹軒裏，凄清秋夜長。掃風簾櫳冷，篩月几席涼。

春日即景

日暖風和花氣清，得詩吟句賞春晴。圍棋道者笑相
語，樓上丁丁飛玉聲。

又

信脚吟行一杖藜，芒鞋踏遍埜橋西。郊原處處多春
意，楊柳淺深鶯亂啼。

又

芳草池塘浮日光，獨書好句入奚囊。樹陰布地黃鸝
語，蝶夢覺來春晝長。

圍棋

終日圍棋意氣雄
雁行雲陳用兵同
白瑤玄石爭生
死一局安危瞬息中

春雪

剪之夜來嵐曉看雲滿庭冰凝作瓊桂
梅瘦上銀屏
迴野悉鋪白亂山皆失青
午天銷却處還似宿醒醒

又

白雪朝來滿地清
階庭更沒一塵生
壓梅凝柳禁溪
上黃鳥逼寒不出聲

隱者居得南字

幾株門外柳
幾夕終日獨斟春酒
酣不識塵埃浮世

事幽人屏迹在山南
此第一句誤在于此
宜第一句改安之耳

晚晴得來字

深院春閑花自開
斜陽移影上庭槐
老農耕罷欲歸
去田畔溪頭獨往來

春寒花遲

遶籬桃李負佳期
被冒春寒花柝遲
霖雨不須滋萬
物却將冰筋上瓊枝

又

春寒惻惻暮天雪
凝閉百花不許開
枝頭玉露自成
凍無由帶土刷根裁

終日圍棋意氣雄
雁行雲陳用兵同
白瑤玄石爭生
死一局安危瞬息中

春雪

剪之夜來嵐曉看雪滿庭
冰凝作瓊桂
梅瘦上銀屏
迴野悉鋪白亂山皆失青
午天銷却處還似宿醒醒

又

白雪朝來滿地清
階庭更沒一塵生
壓梅凝柳禁溪
上黃鳥逼寒不出聲

隱者居得南字

幾株門外柳
幾夕終日獨斟春酒
酣不識塵埃浮世

事幽人屏迹在山南
此第一句誤在于此
宜第一句改安之耳

晚晴得來字

深院春閑花自開
斜陽移影上庭槐
老農耕罷欲歸
去田畔溪頭獨往來

春寒花遲

遶籬桃李負佳期
被冒春寒花柝遲
霖雨不須滋萬
物却將冰筋上瓊枝

又

春寒惻惻暮天雪
凝閉百花不許開
枝頭玉露自成
凍無由帶土刷根裁

又

東風剪：透重衣春日如冬雪欲飛千樹帶寒花發
晚枝頭玉筋綴珠璣

鴛弄梭

山谿花木引流鶯恰：遷喬百般情見說枝梢有羅
織往來唧唧幾梭聲

海棠

數樹海棠矮檻中高低蜀錦染濃紅寒梢斜月五更
後滿院香傳一陣風

柳

又

東風剪々透重衣春日如冬雪欲飛千樹帶寒花發
晚枝頭玉筋綴珠璣

鴛弄梭

山谿花木引流鶯恰々遷喬百般情見說枝梢有羅
織往來唧唧幾梭聲

海棠

數樹海棠矮檻中高低蜀錦染濃紅寒梢斜月五更
後滿院香傳一陣風

柳

溪畔疎楊綠萬絲翠眉散亂帶烟垂黃鸝梢上閒閑
語雨浣風梳碧玉枝

雪後行

失顛起來又失顛雪餘徑路白鋪氈風吹双袖吟肩
聳蹠玉行過日暮天

晚眺

晚鴉數点度山腰雪鷺一雙過谷口此景此時興味
多半林斜日映花牖

春日眺望

賞心樂事共悠々蹈翠尋芳作勝遊遠眺蕪菁黃世

溪畔疎楊綠萬絲翠眉散亂帶烟垂黃鸝梢上閒閑
語雨浣風梳碧玉枝

雪後行

失顛起來又失顛雪餘徑路白鋪氈風吹双袖吟肩
聳蹠玉行過日暮天

晚眺

晚鴉數点度山腰雪鷺一雙過谷口此景此時興味
多半林斜日映花牖

春日眺望

賞心樂事共悠々蹈翠尋芳作勝遊遠眺蕪菁黃世

界野田多處有高丘

晚春

野水橋西小逕迷
扶疎翠竹亂鶯啼
晚春寂寞風景
少布谷催耕燕掠泥

杜魄

斷腸杜宇為誰啼
旅客思歸淚濕衣
殘月林中松樹
上聲々唯叫不如歸

早行

侵曉乘涼出古龕
東風吹面興方酣
蹈之度嶺過溪
上茅屋金雞唱已三

龍泉寺絕頂 寺在內州石川郡

孤山突出白雲中
迴野亂峯景不同
天際遠帆黏水
去芒鞋竹杖樂無窮

春日即事

乳燕啼鶯春意濃
庭堦花影幾重々
門前忽見紅霞
落一陳東風度老榕

春夜

花邊明月柳邊風
譚話聚頭興味濃
櫓拙煎茶過半
夜時聞山寺數聲鐘

雨後摘蕨

界野田多處有高丘

晚春

野水橋西小逕迷
扶疎翠竹亂鶯啼
晚春寂寞風景
少布谷催耕燕掠泥

杜魄

斷腸杜宇為誰啼
旅客思歸淚濕衣
殘月林中松樹
上聲々唯叫不如歸

早行

侵曉乘涼出古龕
東風吹面興方酣
蹈之度嶺過溪
上茅屋金雞唱已三

龍泉寺絕頂 寺在內州石川郡

孤山突出白雲中
迴野亂峯景不同
天際遠帆黏水
去芒鞋竹杖樂無窮

春日即事

乳燕啼鶯春意濃
庭堦花影幾重々
門前忽見紅霞
落一陳東風度老榕

春夜

花邊明月柳邊風
譚話聚頭興味濃
櫓拙煎茶過半
夜時聞山寺數聲鐘

雨後摘蕨

前嶂雨過春蕨肥獨携籃子出柴扉燒痕茁綠如拳
在曾是夷齊不食飢

春日即興

燕語鶯吟春日閑庭堦花拆華門閉飛泉落澗逾深
宋山路悠々人自還

山村

一聲啼鳥一株松一曲牧歌一朵峯竹影入窓推不
出時聞村女夕陽春

春日

籠袖林間行一回却思今日午時齋板橋東畔古叢

裡躑躅杏花相逐開

又

倚欄得句賞春晴柳色花光滿眼復是一番微雨
後黃鸝如洗雨三聲

夜興

地爐活火獨烹茶背壁青燈暗結花飢鼠兩三竊魁
芋棚頭踏倒破沙鍋

送春

東風不住去如梭啼鳥一聲日已斜不勝沈吟亦回
首殘紅猶落兩三花

前嶂雨過春蕨肥獨携籃子出柴扉燒痕茁綠如拳
在曾是夷齊不食飢

春日即興

燕語鶯吟春日閑庭堦花拆華門閉飛泉落澗逾深
寂山路悠々人自還

山村

一聲啼鳥一株松一曲牧歌一朵峯竹影入窓推不
出時聞村女夕陽春

春日

籠袖林間行一回却思今日午時齋板橋東畔古叢

裡躑躅杏花相逐開

又

倚欄得句賞春晴柳色花光滿眼復是一番微雨
後黃鸝如洗雨三聲

夜興

地爐活火獨烹茶背壁青燈暗結花飢鼠兩三竊魁
芋棚頭踏倒破沙鍋

送春

東風不住去如梭啼鳥一聲日已斜不勝沈吟亦回
首殘紅猶落兩三花

首夏

斗杓建午日初永 野岸榴萼又欲紅 蝴蝶不隨春色去 却來庭砌舞薰風

雨後山行

雨霽千峰綠於藍 日高欲上出禪龕 杖藜筇笠枯藜杖 古木叢中小徑三

夏初登山

松間一逕碧苔封 步入雲烟第幾重 春過林巒無別事 谿邊唯有柳蒙茸

夏日

首夏

斗杓建午日初永 野岸榴萼又欲紅 蝴蝶不隨春色去 却來庭砌舞薰風

雨後山行

雨霽千峰綠於藍 日高欲上出禪龕 杖藜筇笠枯藜杖 古木叢中小徑三

夏初登山

松間一逕碧苔封 步入雲烟第幾重 春過林巒無別事 谿邊唯有柳蒙茸

夏日

垂柳綠陰滿野塘 雙燕補巢忙 山蟬吟罷日將仄 風起方床珍簟涼

又

庭院無人佳景長 黑甜一枕傲羲皇 幾聲啼鳥夢驚覺 日在簾鉤更夕陽

又

一簾清風值萬金 登樓眺望豁胸襟 數株柳樹橫閑戶 上有新蟬深處吟

又

避暑登高閣 乘涼出竹扉 門庭無別事 黃鳥將雛歸

垂柳綠陰滿野塘 雙燕補巢忙 山蟬吟罷日將仄 風起方床珍簟涼

又

庭院無人佳景長 黑甜一枕傲羲皇 幾聲啼鳥夢驚覺 日在簾鉤更夕陽

又

一陣清風值萬金 登樓眺望豁胸襟 數株柳樹橫閑戶 上有新蟬深處吟

又

避暑登高閣 乘涼出竹扉 門庭無別事 黃鳥將雛歸

夏夜

一枕北風興味濃
攪眠半夜數聲鐘
覺來擁扇吟行處
月在花梢第幾重

夏雨

天黔未雨時
蒸鬱汗珠流
蕭颯雨臻后
簾牀五月秋
雨後山亭即事

把住山雲俱倚欄
夕陽山外水漫漫
山前閃々數歸鳥
雨後山客晚未還

江邊秋夜

秋夜無人獨倚欄
山肩擔出水晶盤
五更不睡望江

夏夜

一枕北風興味濃
攪眠半夜數聲鐘
覺來擁扇吟行處
月在花梢第幾重

夏雨

天黔未雨時
蒸鬱汗珠流
蕭颯雨臻后
簾牀五月秋
雨後山亭即事

把住山雲俱倚欄
夕陽山外水漫漫
山前閃々數歸鳥
雨後山客晚未還

江邊秋夜

秋夜無人獨倚欄
山肩擔出水晶盤
五更不睡望江

上滿載月明漁艇還

喜雨

早飈作殃百穀枯
盡誠祈雨欲焚巫
如今果得神感應
數日甘霖浩四隅

中元 孟蘭盆會

駸々歲月早循環
淒涼風物屆中元
泛舟赤壁本無益
淡飯簾茶供至尊

訪友不遇

瘦藤相拄訪翠微
吟肩獨聳欵柴扉
松梢一鶴將雛靜
為問遊人歸不歸

上滿載月明漁艇還

喜雨

早飈作殃百穀枯
盡誠祈雨欲焚巫
如今果得神感應
數日甘霖浩四隅

中元 孟蘭盆會

駸々歲月早循環
淒涼風物屆中元
泛舟赤壁本無益
淡飯簾茶供至尊

訪友不遇

瘦藤相拄訪翠微
吟肩獨聳欵柴扉
松梢一鶴將雛靜
為問遊人歸不歸

山居

好山似畫在門外
流水如琴響屋邊
谿畔野花開口笑
塔前烟柳掃眉鮮

漁父

釣舟自背夕陽還
流入前江第幾灣
竹笛吹殘新月出
醉來歸臥蘆華間

秋夜

獨立欄干悲寂寥
雲邊閃々望新鴻
裁衣月下多音信
砧杵數聲落曉風

葉雨打窓

蕭々寒雨打疎櫺
聲遍四山鳴不停
料得岸崖正崩潰
曉看落葉紅滿庭

山寺

生涯此處絕神姦
明月樓前一帶山
倚遍欄干吟不已
老僧自与白雲閑

山寺秋日

萬株松陰乱蟬鳴
遍遶欄干日已傾
又聽樓邊飛瀑響
佛前童子誦經聲

中秋

鴈陣一行弓樣寒
長空雲散轉冰盤
月明銀漢三千

山居

好山似畫在門外
流水如琴響屋邊
谿畔野花開口笑
塔前烟柳掃眉鮮

漁父

釣舟自背夕陽還
流入前江第幾灣
竹笛吹殘新月出
醉來歸臥蘆華間

秋夜

獨立欄干悲寂寥
雲邊閃々望新鴻
裁衣月下多音信
砧杵數聲落曉風

葉雨打窓

蕭々寒雨打疎櫺
聲遍四山鳴不停
料得岸崖正崩潰
曉看落葉紅滿庭

山寺

生涯此處絕神姦
明月樓前一帶山
倚遍欄干吟不已
老僧自与白雲閑

山寺秋日

萬株松陰乱蟬鳴
遍遶欄干日已傾
又聽樓邊飛瀑響
佛前童子誦經聲

中秋

鴈陣一行弓樣寒
長空雲散轉冰盤
月明銀漢三千

里人醉金風十二欄

秋日即事

芙蓉笑日菊凝霜
野店溪橋處處香
晚景江山耐圖畫
一行南雁下斜陽

九日

蕭蕭木葉落高林
風物重陽值萬金
人繫茱萸囊谿畔
過是應獨向山頭斟

秋雨

漠漠雲烟籠遠嶂
朦朧望眼不分明
看來乾坤皆黑暗
併作梧桐一雨涼

里人醉金風十二欄

秋日即事

芙蓉笑日菊凝霜
野店溪橋處處香
晚景江山耐圖畫
一行南雁下斜陽

九日

蕭蕭木葉落高林
風物重陽值萬金
人繫茱萸囊谿畔
過是應獨向山頭斟

秋雨

漠漠雲烟籠遠嶂
朦朧望眼不分明
看來乾坤皆黑暗
併作梧桐一雨涼

送別

賓鴻未斷各西東
丹嶂碧崖幾萬重
他日菊花拆紅處
修篁路畔夕陽春

眺望

終日倚欄獨眺望
風吹岳瀑玉珠瀉
自看木葉舞長空
錯認燕子飛上下

秋日

庭樹殘蟬訴晚涼
蕭條秋意滿西堂
蛩如針耳吟空砌
雁侶倦飛過塞疆

晚秋

送別

賓鴻未斷各西東
丹嶂碧崖幾萬重
他日菊花拆紅處
修篁路畔夕陽春

眺望

終日倚欄獨眺望
風吹岳瀑玉珠瀉
自看木葉舞長空
錯認燕子飛上下

秋日

庭樹殘蟬訴晚涼
蕭條秋意滿西堂
蛩如針耳吟空砌
雁侶倦飛過塞疆

晚秋

駸々歲月似飛梭
景物蕭條霜降竹
南北雁飛聲颺々
西東葉散影婆々

訪友不遇

友人屏迹隱烟霞
訪入溪々三四家
一犬守籬茆屋
晚茫々不見去路除

過惟岳禪師居

行過烟村小徑斜
溪々略約記霜葩
籬邊殘菊秋已
謝新拆早棗一兩花

秋夜

梧葉蕭々響夜闌
茅店羈客淚無乾
砌蛩聲聒不知

曉黃菊籬邊珠露溥

江風

江風瑟瑟蘆招手
又妨讀書翳曉燈
篷底夜深清露
重引來寒氣作衣楞

旅中即事

數行賓雁千行淚
松下打眠愁意長
一陣西風嶺頭
晚紛々入夢菊花香

秋夜對月

秋晴銀漢掛冰盤
光映珠簾徹骨寒
幾个閑人夜凭
檻苦吟尋覓得詩難

駸々歲月似飛梭
景物蕭條霜降竹
南北雁飛聲颺々
西東葉散影婆々

訪友不遇

友人屏迹隱烟霞
訪入溪々三四家
一犬守籬茆屋
晚茫々不見去路除

過惟岳禪師居

行過烟村小徑斜
溪々略約記霜葩
籬邊殘菊秋已
謝新拆早棗一兩花

秋夜

梧葉蕭々響夜闌
茅店羈客淚無乾
砌蛩聲聒不知

曉黃菊籬邊珠露溥

江風

江風瑟瑟蘆招手
又妨讀書翳曉燈
篷底夜深清露
重引來寒氣作衣楞

旅中即事

數行賓雁千行淚
松下打眠愁意長
一陣西風嶺頭
晚紛々入夢菊花香

秋夜對月

秋晴銀漢掛冰盤
光映珠簾徹骨寒
幾个閑人夜凭
檻苦吟尋覓得詩難

晚秋山行

勝槩世塵外新吟杖屨中
砧響鳴山鳥錦晒滿林楓

秋日

丹雘楚筠上黃菊潤流隈
燕子拌巢去雁賓過塞來

晚秋

山頭楓葉染深紅籬畔菊
花開淺黃万里蒼天秋日

山寺冬日

林罅斜陽鴉散乱山邊出
澗水潺湲暮僧相對坐終
日窓外丹山正欲昏

晚秋山行

勝槩世塵外新吟杖屨中
砧響鳴山鳥錦晒滿林楓

秋日

丹楓楚筠上黃菊潤流隈
燕子辭巢去雁賓過塞來

晚秋

山頭楓葉染深紅籬畔菊
花開淺黃万里蒼天秋日

山寺冬日

林罅斜陽鴉散乱山邊幽
澗水潺湲暮僧相對坐終
日窓外丹山正欲昏

謝寄梅

春到江南光景好花魁數
朶寄贈來瓊葩玉蕊參差
列枝上更無一點埃

碧岩錄講演

一帙碧岩百則中言々句々
悉流通欲知清淨真般
若匝地揚塵八面風

雪

寒風剪出暮天雪乱灑林
梢駭宿禽景物蕭條宜乘
興孤棹撐月訪山陰

山居即事

謝寄梅

春到江南光景好花魁數
朶寄贈來瓊葩玉蕊參差
列枝上更無一點埃

碧岩錄講演

一帙碧岩百則中言々句々
悉流通欲知清淨真般
若匝地揚塵八面風

雪

寒風剪出暮天雪乱灑林
梢駭宿禽景物蕭條宜乘
興孤棹撐月訪山陰

山居即事

幽居對小園
蘿蔔稍須餐
漏斷覺殘夜
砧疎知遠村
清泉響幽澗
白雪壓頽垣
塵世不閑意
看書獨負暄

松竹梅

盤松茅屋上
翳鬱半龍鱗
三徑竹擎雪
一樹梅迎春

夜坐

箔捲竹風淒
移床月已西
五更無別事
一唱遠村雞

象戲

九宮肅步兵
城破已縱橫
飛砲要行路
出車如有聲

睡起

睡起紙窓下
听鶯憶友生
更因斜日曜
夢破滿空清

畫鷹

屏間一畫鷹
肅介氣如鵬
羽翼何時節
凌虛万里騰

幽人

絕頂有幽士
茆庵足安恬
三盃酒半醒
一枕睡方甜

松逕羊腸曲
茶園雀舌纖
詩書幾千卷
滿架帶牙籤

閑居花

閑居少送迎
山水鎮相從
冒雨草花拆
滿庭曉露濃

紅肌香惹蝶
粉靨蕊和蜂
一枕半窓後
日移碎影重

全

春間臭味長
好句滿奚囊
枝上有嬌艷
葉間芬異香

幽居對小園
蘿蔔稍須餐
漏斷覺殘夜
砧疎知遠村
清泉響幽澗
白雪壓頽垣
塵世不閑意
看書獨負暄

松竹梅

盤松茅屋上
翳鬱半龍鱗
三徑竹擎雪
一樹梅迎春

夜坐

箔捲竹風淒
移床月已西
五更無別事
一唱遠村雞

象戲

九宮肅步兵
城破已縱橫
飛砲要行路
出車如有聲

睡起

睡起紙窓下
听鶯憶友生
更因斜日曜
夢破滿空清

畫鷹

屏間一畫鷹
肅介氣如鵬
羽翼何時節
凌虛万里騰

幽人

絕頂有幽士
茆庵足安恬
三盃酒半醒
一枕睡方甜

松逕羊腸曲
茶園雀舌纖
詩書幾千卷
滿架帶牙籤

閑居花

閑居少送迎
山水鎮相從
冒雨草花拆
滿庭曉露濃

紅肌香惹蝶
粉靨蕊和蜂
一枕半窓後
日移碎影重

同

春間興味長
好句滿奚囊
枝上有嬌艷
葉間芬異香

胭脂嘗燕弄，帛秀蜂蝶忙。我亦謝陶輩，花詩兩不狂。

山行 排律

杖屨上前嶂，春來壁更濃。薜蘿翠滴々，竹林烟重々。
絕壁枕榔滿，舊溪苔蘚封。石蹲山下虎，松臥水中龍。
紅日拆花去，清香惹蝶蜂。

閑居篇

幽人嘆陸沈，隱迹在青岑。花落本無事，雲飛尚有心。
一庭苔蘚密，三逕薜蘿深。谷鳥歌清怨，山蟬奏短琴。
泉鳴無調曲，嶺響不絃琴。携杖行松下，看書坐竹陰。
塵中懶似病，世上兀如瘖。鶴唳嶺頭舞，猿啼巖下音。

胭脂鶯燕弄，帛秀蜂蝶忙。我亦謝陶輩，花詩兩不狂。

山行 排律

杖屨上前嶂，春來壁更濃。薜蘿翠滴々，竹林烟重々。
絕壁枕榔滿，旧溪苔蘚封。石蹲山下虎，松臥水中龍。
紅日拆花去，清香惹蝶蜂。

閑居篇

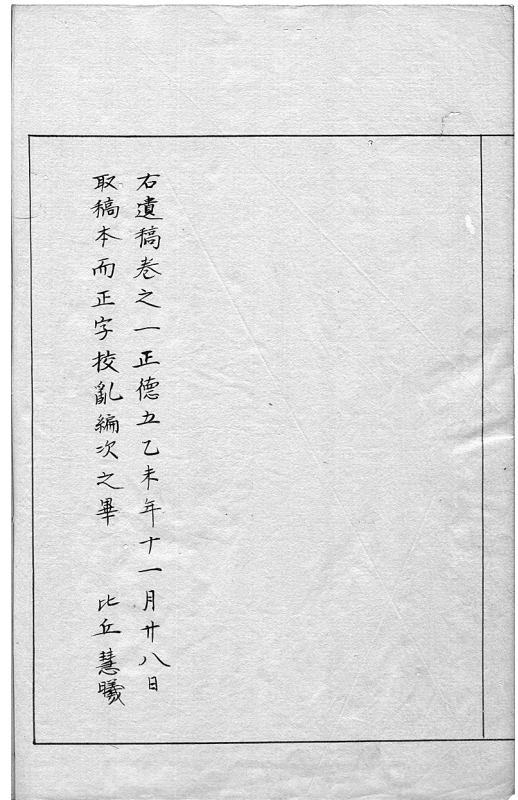
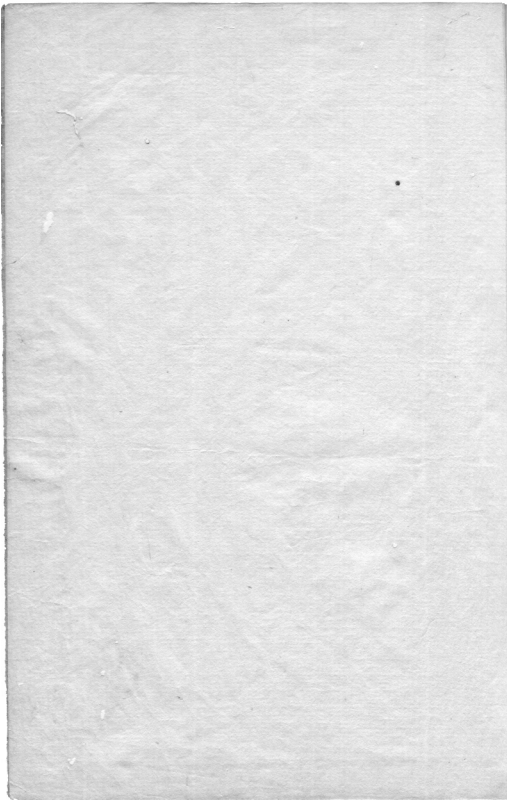
幽人嘆陸沈，隱迹在青岑。花落本無事，雲飛尚有心。
一庭苔蘚密，三逕薜蘿深。谷鳥歌清怨，山蟬奏短琴。
泉鳴無調曲，嶺響不絃琴。携杖行松下，看書坐竹陰。
塵中懶似病，世上兀如瘖。鶴唳嶺頭舞，猿啼巖下音。

清風味獨笑，明月伴孤斟。童子敲茶臼，樵夫打藁碓。
野狐更穿壁，宿鳥已歸林。不管利名客，多年只布衾。

妙極堂遺稿卷之一

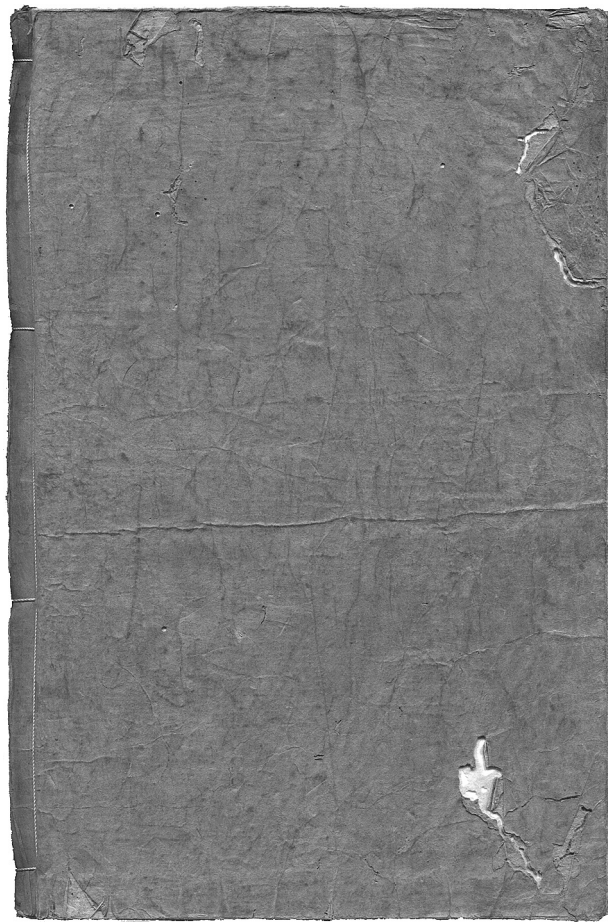
清風味獨笑，明月伴孤斟。童子敲茶臼，樵夫打藁碓。
野狐更穿壁，宿鳥已歸林。不管利名客，多年只布衾。

妙極堂遺稿卷之一



右遺稿卷之一正徳五乙未年十一月廿八日
取稿本而正字校亂編次之畢 比丘慧曦

右遺稿卷之一正徳五乙未年十一月廿八日
取稿本而正字校亂編次之畢 比丘慧曦



「①裏表紙

(てらつ まりえ 生活機構研究科生活文化研究専攻修了生)
(せきぐち しずお 歴史文化学科)